

十腰内 2 式土器の再検討

西村 広経

要旨

十腰内 2 式土器は東北地方北部の縄文後期中葉に位置付けられている土器型式だが、その時空間的範囲には不明瞭な点が多い。時間的には、前後に別の土器型式が介在する可能性が指摘され、他地域との併行関係についても研究者間で齟齬がある。空間的には、東北地方南部との異同は明示されていない。本稿は、十腰内 2 式土器の分析を通じて、東北地方における後期中葉土器編年の再構築を試みた。

十腰内 2 式には複数系統の文様があることが知られており、その変遷を解明するためには、同時期における文様の組み合わせを把握する必要がある。そのため、本稿では遺構等で一括出土した土器群を分析単位とした。分析対象の空間的範囲は東北地方全域である。集成した土器群を文様の組み合わせに基づいて分類し、各分類群の分布、層位的関係、型式学的特徴を検討した。

分析の結果、従来十腰内 2 式としてとらえられてきた土器群は、文様の組み合わせから少なくとも 2 グループに大別されることが明らかになった。一方のグループでは、横帯文に入り組んだ磨消縄文が伴う。他方では、横帯文にかぎ状・クラック状の磨消縄文が伴う。いずれのグループも東北地方に広く分布しており、地域差とは考えられない。また、いくつかの層位的な出土例や、型式学的な特徴から、両群は時間差をもつ土器群であることを示した。したがって、従来の十腰内 2 式は 2 段階に細分される。

以上の分析にもとづき、縄文後期中葉の東北地方全域を単一の土器型式圏ととらえ、3 段階の編年案を提示した。第 1・第 2 段階は従来の十腰内 2 式を細分したものであり、第 3 段階は従来の十腰内 3 式に相当する。各段階は、それぞれ関東地方の加曽利 B1 ～ B3 式に併行する。

1. はじめに

十腰内 2 式土器は、青森県弘前市十腰内 (2) 遺跡の調査で出土した十腰内第 II 群土器を標式とする土器型式であり、東北地方北部の縄文後期中葉に位置付けられている (今井・磯崎 1968)。東北地方北部では広く用いられている土器型式だが、標式資料の内容が質的・量的に不十分との批判もある (岡田 1986、金子 1993, 1994a、関根 2005 など)。新たに型式を設定する試みもみられたが (金子 1993, 1994a・b; 鈴木 1996, 2001)、定着はしていない。

十腰内 2 式については、他地域との併行関係が問題とされてきた。設定当初、十腰内 II 群土器にみられる横位平行沈線を縦位短沈線で区切る文様が関東地方の加曽利 B1 式を特徴づける横帯文に類似することから、十腰内 2 式と加曽利 B1 式が同時期に位置づけられ、後続する十腰内 3 式は加曽利 B2 ～ B3 式併行とみなされた (今井・磯崎 1968)。

その後、十腰内 2 式を加曽利 B2 式併行と位置づける見解も提示されており (新屋 2015; 金子 1994a;

小林 2015)、未だ決着をみていない。

筆者は以前、東北地方の異形台付土器について検討を試みた (西村 2016)。異形台付土器は後期中葉の加曽利 B2 式期に出現し、関東地方東部を中心に分布する。東北地方・北海道でも後期中葉から後葉にかけて、出土例は少ないものの分布が認められ、両地域間の関係を検討する上で重要な資料といえる。しかしながら、土器型式の併行関係が曖昧であったため、十分な検討ができなかった。このことから、後期中葉土器群について再検討する必要性を認識したことが、本研究の動機である。

また、後期中葉は東北地方内部の地域間関係についても検討の必要がある。東北南部には後期中葉の土器型式として宝ヶ峯式あるいは宮戸 2a・2b 式が設定されている。より関東地方に近い福島県域では、該期の土器群が加曽利 B 諸型式の範疇でとらえられている。

これらの土器群は、東北北部の十腰内 2・3 式に酷似している。しかし、各地域で別個に設定された土器型式が踏襲されてきており、地域間を横断的に分析した研究事例は、現状ではきわめて少ない。型式的に同

一内容の土器群が、地域ごとに別個に型式設定されている可能性は無視できないだろう。大なり小なり地域差はあるにしても、それが土器型式を区分するメルクマールとして妥当な差異であるかどうかは、検討を要する問題である。

さらに、近年の研究では、加曽利 B 諸型式が、西日本に与えた影響が注目されている。福永将大によれば、加曽利 B1 式期と加曽利 B2 式期以降とは、関東地方と西日本との間で土器情報伝達のあり方が変容していることが指摘されている（福永 2017）。該期の様相を汎列島規模で検証するためにも、土器型式編年の整備は重要な課題である。

以上のような研究状況の認識にもとづき、本稿では十腰内 2 式の再検討を通じて、東北地方における後期中葉土器群の編年案を提示する。

2. 十腰内 2 式をめぐる研究史

2-1. 十腰内 2 式の設定

東北地方における縄文時代後期中葉の土器について、戦前に言及されることはほとんどなかった。

東北地方北部における後期の土器型式は、十腰内(2)遺跡の調査にもとづいて設定された（今井・磯崎 1968）。十腰内編年では、後期前半から晩期初頭の土器を第 I～VI 群に分類している。このうち第 I 群と第 VI 群は層位的なまとまりを持って出土したものとして分類されているが、第 II～V 群については他地域で既に設定されていた土器型式との比較による型式学的な分類である。なお、磯崎はこれらの土器群について報文では十腰内第 I～VI 群と呼称しているが（今井・磯崎 1968）、先行して発表された『日本原始美術 I』では十腰内 1～5 式と呼称している（磯崎 1964）。以下、本稿では磯崎の表記にならい、十腰内(2)遺跡出土土器群については十腰内第 I～VI 群土器とローマ数字により表記し、これらを標式資料とする土器型式については十腰内 1～5 式とアラビア数字

で表記することとする。

十腰内第 II 群土器は、加曽利 B1 式に併行する土器群として抽出された。その文様には「直線的な狭い文様帯を構成するもの (a)」と、「曲線的な入組文を描くもの (b)」があるとされている。a 類文様にみられる平行沈線を縦位の弧状沈線や蛇行沈線で区切る手法が加曽利 B1 式の横帯文に類似することから、両者を併行関係に位置づけ、東北地方南部の宮戸 2a 式・宝ヶ峯式の一部とも共通するとしている。一方、b 類文様については東北地方の在地的な文様であるとしている（今井・磯崎 1968）。なお、a 類・b 類文様が同時期の所産であるとする明確な根拠は示されていない。図 1 に十腰内 2 式の標式資料を示した。

型式設定以降の研究史については鈴木 (2008) に詳しいので参照されたい。以下、本稿の論点に関係の深い先行研究を示す。

2-2. 十腰内 2 式に先行する土器型式

十腰内 1 式と十腰内 2 式との間に別の土器型式が介在することが指摘されている。

葛西勲は青森県青森市四ツ石遺跡第 III 群土器について検討し、「十腰内 I 式第 4 段階と十腰内 II 式 a 類の間を埋める資料」と位置づけ、四ツ石式を設定した（葛西 1987）。図 2 には四ツ石式の標式資料を示した。四ツ石式は十腰内 II 群土器のうち b 類とされた、入り組んだ磨消縄文をもつ在地系土器を主体としている。十腰内 II 群土器 a 類と b 類との共存を疑問視し、時間差のある土器群とみていることがうかがえる。

金子昭彦は岩手県平泉町新山権現社遺跡の後期中葉に位置づけられる第 III 群土器を分析している。金子は新山権現社遺跡第 III 群土器を 1～3 類に分類し、それらを層位的に前後関係が把握できる標式資料として新山権現社 1～3 式を設定した。（金子 1993, 1994a）。新山権現社 1 式には多重沈線を用いる土器が多く含まれる点で四ツ石式とは様相が異なる。

十腰内第 II 群土器 a



十腰内第 II 群土器 b

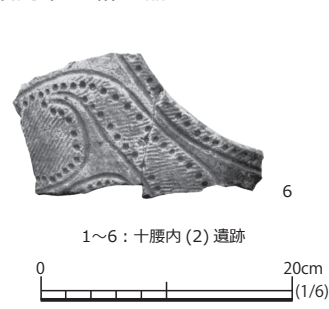


図 1 十腰内 2 式の標式資料

なお、新山権現社 1 式について金子は、葛西の業績を評価し四ツ石式とすべきであったと述べている（金子 1999）。

また、鈴木克彦は岩手県域において、別に当該期の型式を設定している。岩手県盛岡市萩内遺跡出土土器を標式とする萩内 A・B 式が提唱され、萩内 B 式が十腰内 2 式と併行関係とされている（鈴木 2001）。萩内 A 式は新山権現社 1 式とほぼ同じ内容である。

2-3. 十腰内 2 式・3 式の間間的な土器型式

鈴木克彦は十腰内 2 式と十腰内 3 式との間に丹後平式を設定している。丹後平式は青森県八戸市丹後平(2)遺跡第 8 号竪穴住居跡出土土器を標式としている（図 3）。十腰内 2 式 a 類文様をもつ土器と、十腰内 2 式 b 類文様とは異なる磨消文様をもつ土器が共伴しており、a 類文様をもたない十腰内 3 式からも分離されとしている（鈴木 1996）。丹後平式の磨消縄文は、クランク状、かぎ状、連続する弧線など大ぶりのモチーフを用いており、十腰内 3 式に近似する。

また、鈴木は岩手県岩手町川口Ⅱ遺跡の竪穴住居跡一括資料を標式として川口 2 式を設定している（図 4）。内容は丹後平式と酷似しており、鈴木によれば同じ枠組みに入る可能性もあるらしい（鈴木 2001）。

2-4. 東北地方南部における後期中葉土器群の研究

東北地方南部では、伊東信雄が後期を南境式、宝ヶ峯式、金剛寺式の 3 段階に区分し、宝ヶ峯式が後期中葉に相当するとした（伊東 1957）。また、後藤勝彦が後期中葉の土器型式として宮戸 2a・2b 式を設定している（後藤 1957）。

小林圭一は、伊東による時期区分を踏襲し、後期中葉土器群総体を宝ヶ峯式ととらえた上で、宝ヶ峯 1～3 式に細分する編年案を示している（谷藤・関根編 2001）。また、水戸部秀樹は小林の理解を踏襲し、後期中葉を宝ヶ峯 1～3 式に細分している（水戸部 2004）。

鈴木克彦は後期中葉を宮戸 2a 式、宝ヶ峯式、宮戸 2b 式の 3 段階に区分し、それぞれ東北北部十腰内 2 式、丹後平式、十腰内 3 式に併行させた（鈴木 2003）。

福島県域では後期中葉の土器群が加曽利 B 諸型式の範疇でとらえられている。

鈴木克彦は、福島県域の後期中葉土器群が、加曽利 B 諸型式とは異なる特徴をもつことを指摘し、福島県域の土器型式として番匠地式、弓手原 A 式、川原式を提唱している（鈴木 2005）。

山岸英夫は福島県域に十腰内第Ⅱ群土器と共通する要素をもつ土器が存在することを指摘している。山岸によれば、十腰内Ⅱ群 a 類にみられる横帯文は堀之内 2 式併行期から加曽利 B2 式併行期まで認められ、横帯文によって土器の時期を決定することはできず、十腰内第Ⅱ群とされた土器には時間幅がある可能性を指摘している（山岸 2005）。

2-5. 関東地方との併行関係

十腰内 2 式は、加曽利 B1 式に併行する土器型式として設定された（今井・磯崎 1968）。東北地方北部では現在でもこの理解は踏襲されている。『青森県史資料編 考古 2（縄文後期・晩期）』に掲載された後期から晩期の土器編年表は、青森県内で一定のコンセ

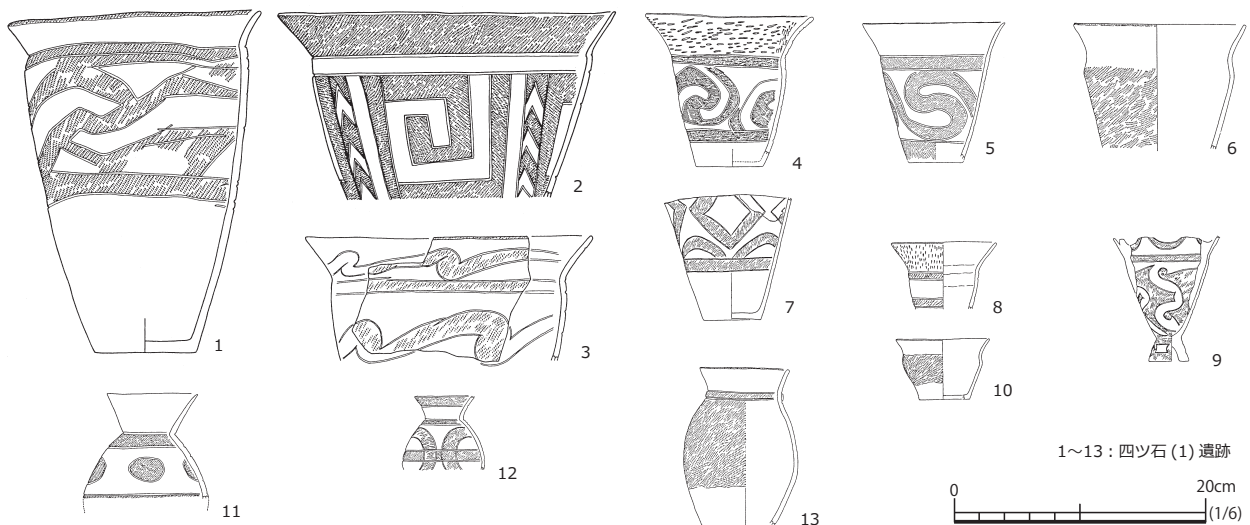
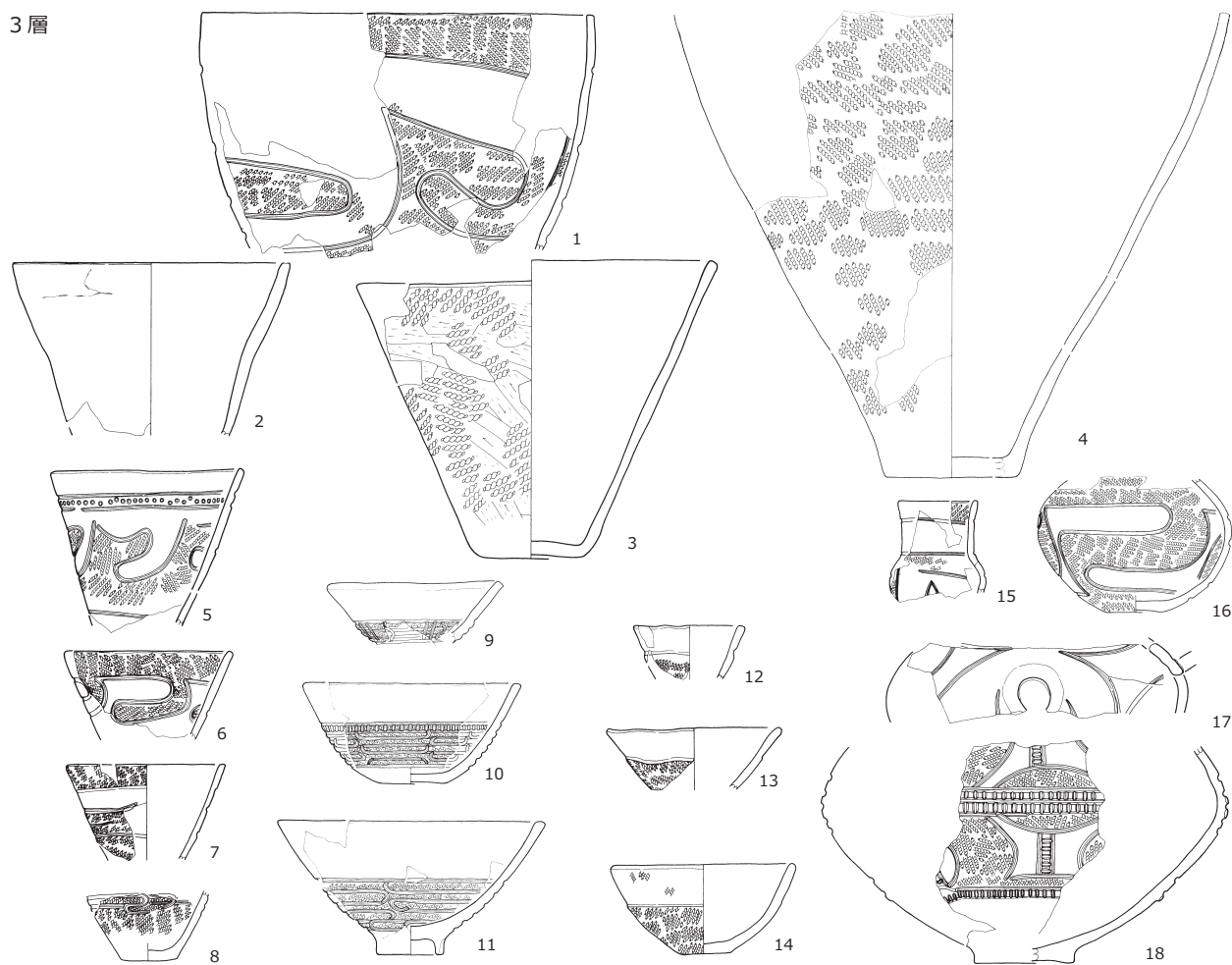


図 2 四ツ石式の標式資料

3層



床面

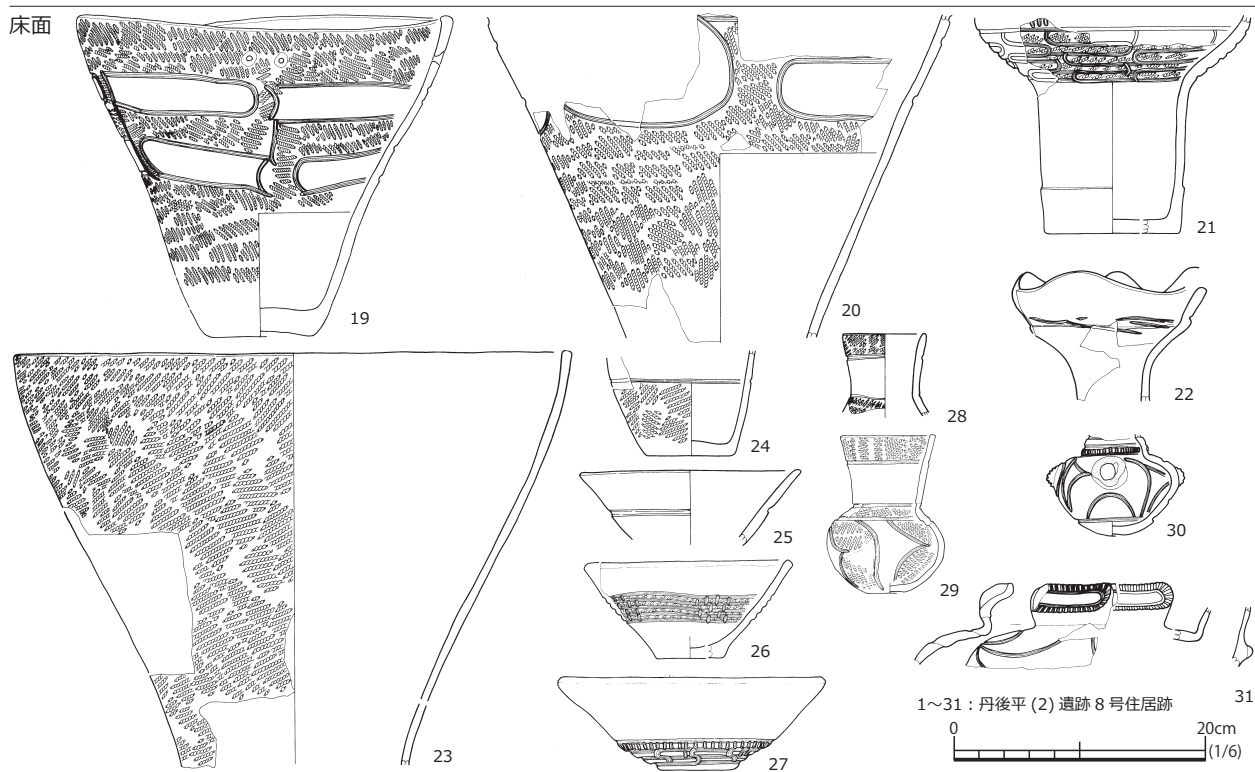
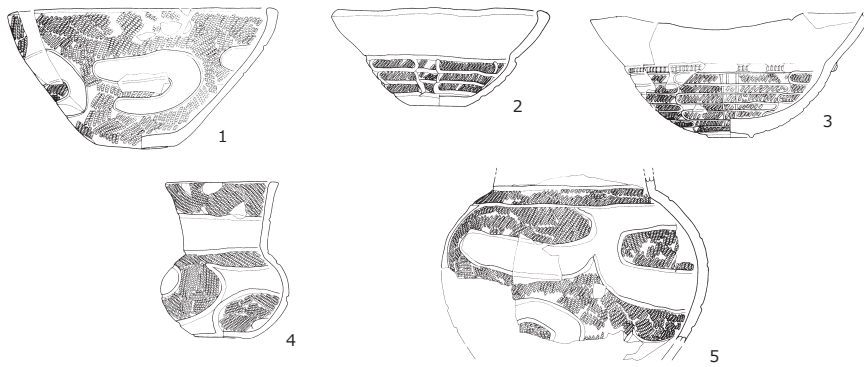
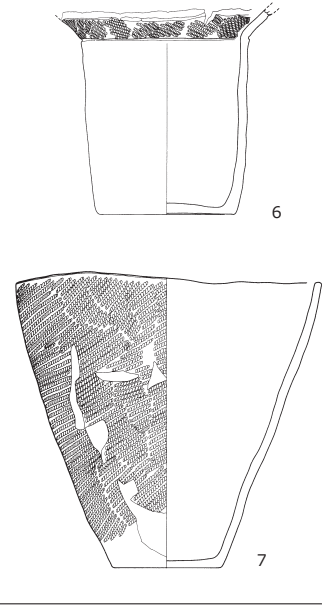


図3 丹後平式の標式資料

BB1 住居跡



BB3 住居跡



BD2 住居跡

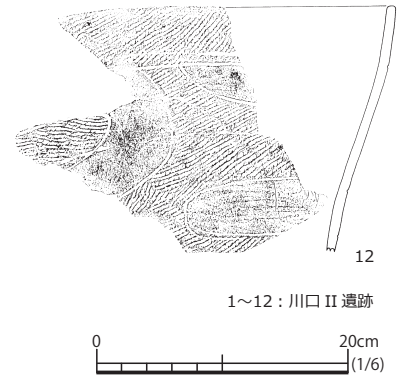
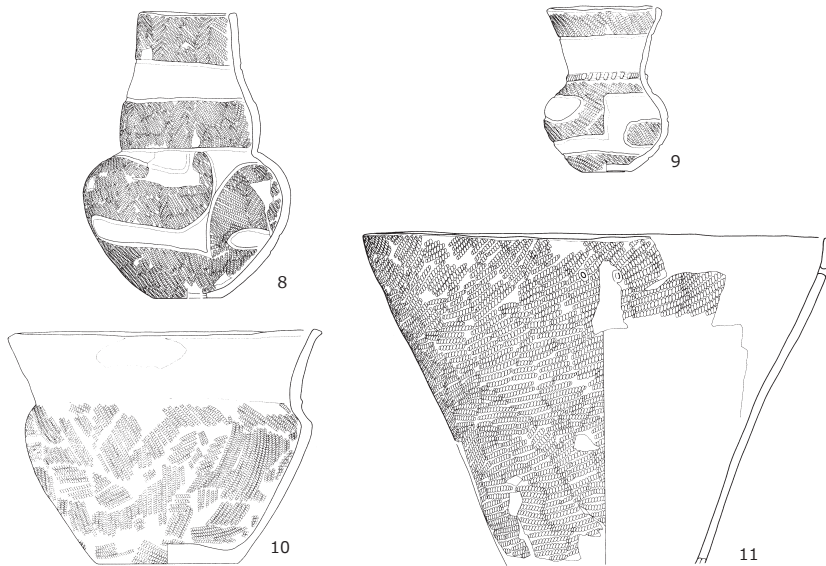


図4 川口2式の標式資料



図5 椎塚貝塚出土加曾利 B2 式土器

ンサスを得たものといえよう。十腰内 2～4 式が後期中葉に位置づけられ、それぞれ加曾利 B1～B3 式併行とされている（青森県史編さん委員会 2013）。

関根達人は、直接的に十腰内 2 式と加曾利 B1 式との併行関係に言及していないが、後続する十腰内 3 式と加曾利 B2 式が併行関係にあることを指摘してい

る。その根拠がとしてあげられているのが、図 5 に示した茨城県椎塚貝塚の浅鉢である。山内清男により加曾利 B2 式とされた資料である（山内 1958）。関根によれば、この鉢にみられるかぎっこ状の磨消縄文は十腰内 3 式と共通するものであり、両者の併行関係を示すという。そして、先行する十腰内 2 式

は加曽利 B1 式併行となることを指摘している（関根 2005）。

一方で、十腰内 2 式を加曽利 B2 式併行と位置づける見解も提示されている。金子は新山権現社 1 式（四ツ石式に相当）を加曽利 B1 式併行に位置づけ、十腰内 2 式に相当する新山権現社 2 式は加曽利 B2 式併行としている。

小林圭一は東北南部の宝ヶ峯 1～3 式をそれぞれ加曽利 B1～B3 式併行に位置付けた（谷藤・関根編 2001）。また、東北北部の十腰内 3 式については東北地方中部の宝ヶ峯 3 式および関東地方の加曽利 B3 式併行に位置付けた（小林 2015）。小林は岡田（1986）や関根（2005）にみられる、十腰内第 IV 群が西ノ浜式に先行し加曽利 B3 式併行とする見解は、十腰内編年が十腰内第 II 群を加曽利 B1 式併行、十腰内第 II 群を加曽利 B2 式併行とした過誤によるものであり、不在となった加曽利 B3 式併行期に十腰内第 IV 群を繰り上げる結果を招いたと指摘している（小林 2015）。

また、関東地方側からは、新屋雅明が十腰内 2 式を加曽利 B2 式併行と位置付けている（新屋 2015）。

以上のように、関東地方との併行関係については、十腰内 2 式を加曽利 B1 式併行、あるいは加曽利 B2 式併行とする見解とがあり、共通の見解が定まっていないのが現状である。

3. 研究の目的と方法

3-1. 研究の目的

十腰内 2 式をめぐる研究史から、主要な論点として以下の 4 点を抽出した。これらを合理的に説明できる編年案を提示することが本稿の目的である。

- ①十腰内 1 式と十腰内 2 式との間に位置する土器型式の認定および編年上の位置付け
- ②十腰内 2 式と十腰内 3 式との間に位置する土器型式の認定および編年上の位置付け
- ③十腰内 2 式の空間的範囲（東北南部との関係）
- ④関東地方との併行関係

3-2. 分析対象

前項で示した論点を検証するため、下記の基準にもとづき分析対象資料を集成した。

- ①空間的範囲は東北 6 県とする。
- ②一括性のある土器群を分析単位とする。ここでいう一括性のある土器群とは、同一遺構から出土した、あるいは同一土層から出土した、まとまりのある土器群である。

③十腰内 2 式の標式資料を特徴づける横帯文または入り組んだ磨消縄文をもつ精製土器を 2 個体以上含む土器群を対象とする。

④文様が確認できるのであれば、器種・器形の不明な破片資料を含める。

⑤同一遺構内で層位を異にして出土した資料は、層間に明瞭な差異が認められない限りは単一の土器群として扱う。

⑥明らかに帰属時期の異なる資料が相当数混在している土器群は対象外とする。

上記①～⑥の基準にもとづき、39 遺跡 99 例を集成した（図 6、表 1～3）。

個体ではなく土器群を分析単位とした理由は、少なくとも 2 系統の文様から構成される十腰内 2 式の型式内容を把握するためには、土器個体よりも土器群を分析単位とする方が適当と考えられるためである。

土器群を分析単位とする方法は小林行雄の弥生土器研究において、土器様式として開発・確立されたものである（小林 1933）。小林は土器様式を人間集団の単位にとらえていたようだが、本稿は基礎的な編年の構築を目的としており、あくまで物質文化現象としての土器群を分析対象とする。

系統の異なる土器が同時期の所産であることを立証するためには、出土コンテクストに基づく共伴関係、あるいは同一個体内に異系統文様が共存するキメラ土器の存在を示す手続きが必要である（佐藤 1974）。ところが、十腰内 II 群土器の a・b 類は、層位的な一括性を根拠として同一土器群に分類されたわけではない。葛西勲が両者の共伴出土例が非常に少ないことを指摘しているものの（葛西 1987）、東北北部の研究者の間では、a・b 類の同時性はなかば自明のこととされている感もある。

また、論点②で問題となる丹後平式は、十腰内 2 式的な土器と十腰内 3 式的な土器とが共伴する土器群を標式として設定されている（鈴木 1996）。したがって、土器個体を単位とした分析では丹後平式の存否を検証することは不可能である。

以上の理由から、本研究の目的を達成するためには、土器群を分析単位とすることが有効である。

なお、後期中葉には北海道にも関東・東北地方と類似した土器群が分布している（鷹野 1978）。合わせて検討すべきであるが、紙数の都合もあり本稿で扱うことはかなわないので、別稿を用意するつもりである。

3-3. 分析方法

分析対象資料について、以下の手順で分析を実施した。

分析 1：個体の分類

各土器群中の各個体を主体的に用いられている文様によって分類する。文様の分類は下記の通りである。図 7 に模式図を示した。

文様 a：横帯文

文様 b：入り組んだ磨消縄文で、区画沈線に沿って列状刺突を施すもの

文様 c：入り組んだ磨消縄文で、刺突のないもの

文様 d：クランク状、かぎ状または弧線主体の大ぶりの磨消縄文

文様 e：多重沈線文

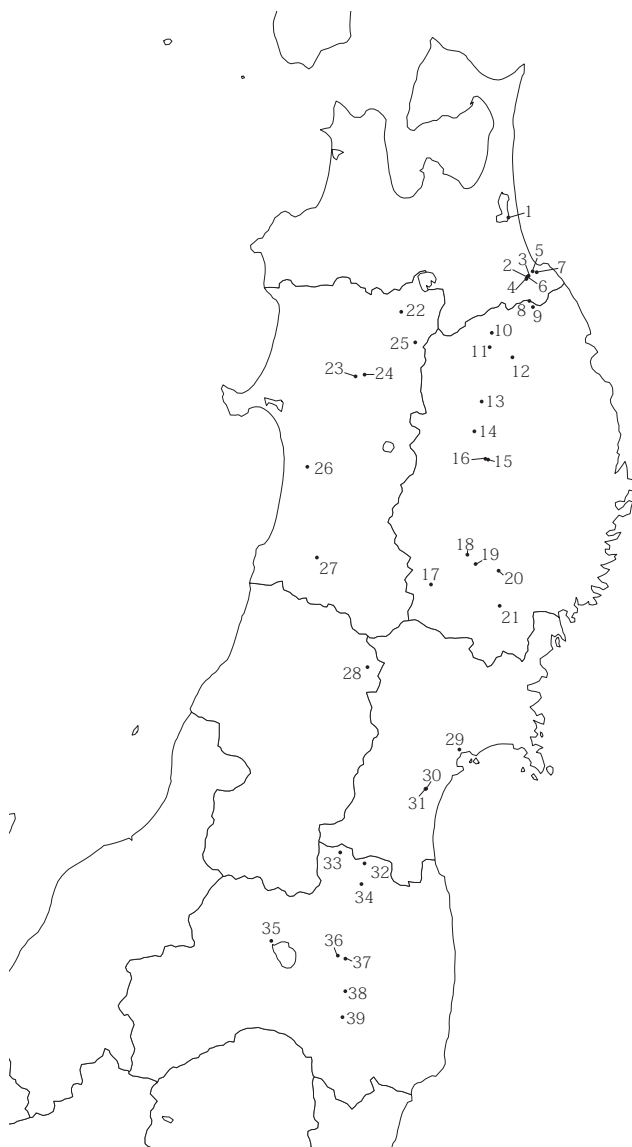
文様 f：鋸歯状沈線文

文様 a は十腰内 II 群 a 類の文様、文様 b・c は十腰内 II 群 b 類文様である。これらを含む土器群を集成しているので、全ての分析対象資料は文様 a・b・c のいずれかを含む。

文様 a、すなわち横帯文は、「横位平行沈線を縦位の沈線等で区切った文様」と定義する。

文様 b・c には青森県青森市四ツ石遺跡第 III 群土器（図 2）や同県平内市李平（2）遺跡第 III 群土器にみられる幾何学的な磨消縄文を含めている。鈴木克彦が「切り返し手法」と呼ぶところの（鈴木 1996）、文様を区画する沈線が鋭角的に屈折することが特徴の一つといえる。

文様 d は十腰内 3 式で主体的にみられる文様である。



- | | |
|------------------|---------------|
| 1 小田内沼 (1) 遺跡 | 21 板倉遺跡 |
| 2 田面木平 (1) 遺跡 | 22 中小阪遺跡 |
| 3 丹後谷地 (1)(2) 遺跡 | 23 漆下遺跡 |
| 4 葦窪遺跡 | 24 森吉家ノ前 A 遺跡 |
| 5 酒美平遺跡 | 25 赤坂 A 遺跡 |
| 6 丹後平 (2) 遺跡 | 26 上野遺跡 |
| 7 新井田古館遺跡 | 27 智者鶴遺跡 |
| 8 長倉 I 遺跡 | 28 かっぱ遺跡 |
| 9 板子屋敷 3 遺跡 | 29 西ノ浜貝塚 |
| 10 浅石遺跡 | 30 王ノ塚遺跡 |
| 11 椀ノ木遺跡 | 31 下ノ内遺跡 |
| 12 市部内遺跡 | 32 川原遺跡 |
| 13 川口 II 遺跡 | 33 弓手原 A 遺跡 |
| 14 野沢 IV 遺跡 | 34 宮畑遺跡 |
| 15 小屋野遺跡 | 35 角間遺跡 |
| 16 川目 A 遺跡 | 36 築場遺跡 |
| 17 尿前 II 遺跡 | 37 町 B 遺跡 |
| 18 金附遺跡 | 38 荒小路遺跡 |
| 19 宝祿 II 遺跡 | 39 堂平 B 遺跡 |
| 20 久田遺跡 | |

図 6 分析対象資料出土遺跡の位置

表 1 分析対象資料一覧表 (1)

No.	都道府県	市町村	遺跡	出土地点	文様						注口		構成パターン	グループ
					a	b	c	d	e	f	A	B		
1	青森県	三沢市	小田内沼 (1) 遺跡	14 号土壇			○		○				C	2
2	青森県	八戸市	田面木平 (1) 遺跡	29 号住居	○			○	○	○			F	3
3	青森県	八戸市	丹後谷地 (1)(2) 遺跡	16 号住居	○						○		A	1
4	青森県	八戸市	丹後谷地 (1)(2) 遺跡	17 号住居	○				○	○			A	1
5	青森県	八戸市	丹後谷地 (1)(2) 遺跡	18 号住居	○				○				A	1
6	青森県	八戸市	丹後谷地 (1)(2) 遺跡	22 号住居	○				○				A	1
7	青森県	八戸市	丹後谷地 (1)(2) 遺跡	24 号住居	○		○	○	○			○	L	3
8	青森県	八戸市	丹後谷地 (1)(2) 遺跡	27 号住居	○				○	○			A	1
9	青森県	八戸市	丹後谷地 (1)(2) 遺跡	32 号住居	○			○		○			F	3
10	青森県	八戸市	丹後谷地 (1)(2) 遺跡	54 号住居	○								A	1
11	青森県	八戸市	菰窪遺跡	99 号住居	○				○				A	1
12	青森県	八戸市	酒美平遺跡	SI26	○		○	○			○		L	3
13	青森県	八戸市	丹後平 (2) 遺跡	8 号住居	○			○	○		○	○	F	3
14	青森県	八戸市	新井田古館遺跡	SK28	○								A	1
15	岩手県	軽米町	長倉 I 遺跡	N14 土坑 2 号	○	○	○		○				J	2
16	岩手県	軽米町	板子屋敷 3 遺跡	11 号住居	○			○					F	3
17	岩手県	軽米町	板子屋敷 3 遺跡	13 号住居			○						C	2
18	岩手県	軽米町	板子屋敷 3 遺跡	14 号住居	○		○			○			E	2
19	岩手県	二戸市	浅石遺跡	1 号住居状遺構	○			○				○	F	3
20	岩手県	一戸町	柵ノ木遺跡	SI02	○			○	○			○	F	3
21	岩手県	葛巻町	市部内遺跡	4 号墓壇	○			○					F	3
22	岩手県	岩手町	川口 II 遺跡	BB1 住居跡	○			○					F	3
23	岩手県	滝沢市	野沢 IV 遺跡	2 号住居	○								A	1
24	岩手県	盛岡市	小屋野遺跡	IB24r	○								A	1
25	岩手県	盛岡市	小屋野遺跡	IIB1s	○	○							D	2
26	岩手県	盛岡市	小屋野遺跡	RA003	○								A	1
27	岩手県	盛岡市	小屋野遺跡	RA006	○						○		A	1
28	岩手県	盛岡市	小屋野遺跡	RD051			○						C	2
29	岩手県	盛岡市	川目 A 遺跡	RA019 住居	○			○	○		○	○	F	3
30	岩手県	盛岡市	川目 A 遺跡	RD459 土坑		○					○		B	2
31	岩手県	盛岡市	川目 A 遺跡	RH185 配石遺構	○						○		A	1
32	岩手県	奥州市	尿前 II 遺跡	VB7a-1 土坑	○								A	1
33	岩手県	奥州市	尿前 II 遺跡	VB8a 住居状遺構	○								A	1
34	岩手県	奥州市	尿前 II 遺跡	VB8 住居跡	○								A	1
35	岩手県	盛岡市	金附遺跡	SK30			○						C	2
36	岩手県	奥州市	宝祿 II 遺跡	1 号住居状遺構	○	○	○		○				J	2
37	岩手県	奥州市	宝祿 II 遺跡	2 号住居状遺構		○	○		○				J	2
38	岩手県	奥州市	宝祿 II 遺跡	9 号土坑			○		○				C	2
39	岩手県	奥州市	久田遺跡	A2 号住居	○			○					F	3
40	岩手県	奥州市	久田遺跡	B4 号住居	○			○			○		F	3
41	岩手県	奥州市	久田遺跡	B5 号住居	○			○					F	3
42	岩手県	奥州市	久田遺跡	B6 号住居	○								A	1
43	岩手県	奥州市	久田遺跡	B20 号住居	○			○					F	3
44	岩手県	一関市	板倉遺跡	SK01			○						C	2

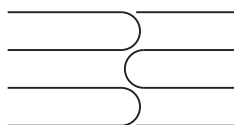
表 2 分析対象資料一覧表 (2)

No.	都道府県	市町村	遺跡	出土地点	文様						注口		構成パターン	グループ
					a	b	c	d	e	f	A	B		
45	岩手県	一関市	板倉遺跡	SK03		○							B	2
46	岩手県	一関市	板倉遺跡	SK12		○							B	2
47	岩手県	一関市	板倉遺跡	SK13	○		○						E	2
48	秋田県	小坂町	中小阪遺跡	SI12	○			○			○		F	3
49	秋田県	北秋田市	漆下遺跡	SK372			○		○				C	2
50	秋田県	北秋田市	漆下遺跡	SK706	○	○							D	2
51	秋田県	北秋田市	漆下遺跡	SB1060	○	○			○				D	2
52	秋田県	北秋田市	漆下遺跡	ST01 捨て場 49 層		○	○		○				D	2
53	秋田県	北秋田市	漆下遺跡	ST01 捨て場 51 層	○	○	○						J	2
54	秋田県	北秋田市	漆下遺跡	ST01 捨て場 56 層			○						C	2
55	秋田県	北秋田市	森吉家ノ前 A 遺跡	SK5057		○	○						G	2
56	秋田県	北秋田市	森吉家ノ前 A 遺跡	SK5076	○								A	1
57	秋田県	鹿角市	赤坂 A 遺跡	SI06	○		○						E	2
58	秋田県	鹿角市	赤坂 A 遺跡	SI07	○								A	1
59	秋田県	鹿角市	赤坂 A 遺跡	SI14	○		○		○				E	2
60	秋田県	鹿角市	赤坂 A 遺跡	SI17	○				○				A	1
61	秋田県	鹿角市	赤坂 A 遺跡	SK41	○								A	1
62	秋田県	秋田市	上野遺跡	SI22	○		○	○					L	3
63	秋田県	由利本荘市	智者鶴遺跡	SK53	○		○						E	2
64	秋田県	由利本荘市	智者鶴遺跡	SK244	○	○							D	2
65	山形県	最上町	かっぱ遺跡	SK614	○	○	○		○				J	2
66	山形県	最上町	かっぱ遺跡	ST4 竪穴住居	○	○	○		○	○		○	J	2
67	山形県	最上町	かっぱ遺跡	ST7 竪穴住居	○								A	1
68	宮城県	松島町	西ノ浜貝塚	2 層	○				○				A	1
69	宮城県	松島町	西ノ浜貝塚	1 層	○		○						E	2
70	宮城県	仙台市	王ノ壇遺跡	I 区 X 層環状配石遺構			○		○				C	2
71	宮城県	仙台市	王ノ壇遺跡	I 区 SI101 竪穴遺構	○			○			○		F	3
72	宮城県	仙台市	王ノ壇遺跡	I 区 IX 層 SK128	○								A	1
73	宮城県	仙台市	王ノ壇遺跡	I 区 IX 層	○			○					F	3
74	宮城県	仙台市	王ノ壇遺跡	V 区 IX 層	○			○					F	3
75	宮城県	仙台市	王ノ壇遺跡	I 区 VII 層	○			○		○			F	3
76	宮城県	仙台市	下ノ内遺跡	SX18	○		○		○				E	2
77	宮城県	仙台市	下ノ内遺跡	SX45	○		○		○				E	2
78	福島県	国見町	川原遺跡	第 3 文化層	○		○	○	○				L	3
79	福島県	福島市	弓手原 A 遺跡	9 号住居	○					○			A	1
80	福島県	福島市	弓手原 A 遺跡	37 号住居		○			○				B	2
81	福島県	福島市	弓手原 A 遺跡	34 号住居	○			○					F	3
82	福島県	福島市	弓手原 A 遺跡	SK01	○			○			○		F	3
83	福島県	福島市	宮畑遺跡	35 トレンチ	○	○		○			○		K	3
84	福島県	磐梯町	角間遺跡	19 号住居	○			○		○	○		F	3
85	福島県	磐梯町	角間遺跡	14 号住居	○								A	1
86	福島県	郡山市	築場遺跡	1 号住居跡	○						○		A	1
87	福島県	郡山市	町 B 遺跡	19 号住居	○			○	○		○		F	3
88	福島県	郡山市	町 B 遺跡	20 号住居	○		○			○			E	2

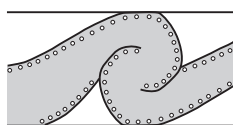
表 3 分析対象資料一覧表 (3)

No.	都道府県	市町村	遺跡	出土地点	文様						注口		構成パターン	グループ
					a	b	c	d	e	f	A	B		
89	福島県	郡山市	町 B 遺跡	25 号住居	○	○	○		○				J	2
90	福島県	郡山市	町 B 遺跡	33 号住居	○			○					F	3
91	福島県	郡山市	町 B 遺跡	34 号住居	○				○				A	1
92	福島県	郡山市	町 B 遺跡	35 号住居	○		○		○				E	2
93	福島県	郡山市	町 B 遺跡	37 号住居	○	○	○		○				J	2
94	福島県	郡山市	町 B 遺跡	40 号住居	○		○						E	2
95	福島県	郡山市	町 B 遺跡	41 号住居	○								A	1
96	福島県	郡山市	町 B 遺跡	43 号住居	○				○				A	1
97	福島県	郡山市	町 B 遺跡	47 号住居	○				○				A	1
98	福島県	郡山市	荒小路遺跡	1 号住居	○		○		○				E	2
99	福島県	玉川村	堂平 B 遺跡	2 号住居跡	○				○				A	1

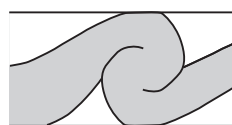
文様 a



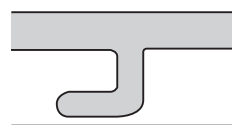
文様 b



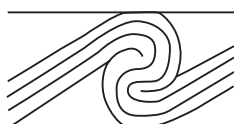
文様 c



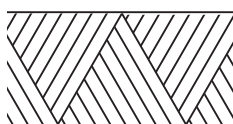
文様 d



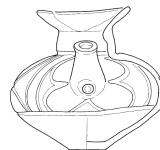
文様 e



文様 f



注口土器 A



注口土器 B



図 7 文様模式図

文様 e は 3 ～ 5 条程度を単位とする多重沈線による文様である。十腰内 2 式の標式資料中には認められない文様であるが、新山権現社 1 式や萩内 A 式を特徴づける文様とされているので（金子 1993, 1994a；鈴木 2001）、計数した。

文様 F は傾きの異なる斜位沈線を組み合わせた鋸歯状の文様である。鈴木によれば、丹後平式の浅鉢に特徴的に施文される（鈴木 1996）。

注口土器は上記のいずれにも該当しないモチーフを用いているので、別に分類群を設定した。沈線・キザミのみで文様を構成するものを注口土器 A、磨消縄文を用いたものを注口土器 B とした。注口土器 A は鈴木克彦が「宝ヶ峯型注口土器」と呼んでいるものに相当する（鈴木 1997）。

表 1 ～ 3 には各資料における各文様の存否を示した。量的な比は反映していない。ある文様をもつ土器が 1 個体でも含まれていれば、該当する欄に○印を付した。また、注口土器を除いて器種・器形も区別していない。

分析 2：土器群構成パターンの分類

土器群を構成する文様の組み合わせによって分類する。

分析 3：空間分布の検討

各分類群を地図上にプロットし、空間分布を検討する。

分析 4：時間的関係の検討

層位的関係を把握できる事例を基準として、各分類群の共時性・異時性を検討する。また、型式学的に各分類群を比較し、時間的関係を検討する。

分析 5：併行関係の検討

共伴例の検討、型式学的検討を通じて加曽利 B 諸型式との併行関係を検討する。

4. 分析

4-1. 土器群構成パターンの分類

分析 1 の結果、各文様の存否は表 1 ～ 3 に示した。

構成パターンの分類は、集成の基準とした文様 a、文様 b、文様 c に加えて、丹後平式や川口 2 式の指標とされた文様 d の組み合わせにより行った。

文様 4 種の組み合わせは 15 通りありえるが、集成の方法により、文様 d のみの組み合わせはありえない。したがって、全ての対象土器群はパターン A ～ N、14 通りのいずれかに分類される。各パターンを構成する文様の組み合わせを表 4 に示した。また、各土器群が該当するパターンは表 2 ～ 4 に示している。

文様 a を含む土器群は 96 例中 82 例で、ほとんどの土器群は文様 a を含むといえる。文様 a のみからなるパターン A が最も多い。また、文様 a は文様 b・c・d いずれとも共伴する。

文様 b は文様 a および c と組み合わせる場合が多い。一方で、文様 b と文様 d をともに含む土器群は 1 例しかない。

文様 c は文様 a および b と組み合わせる場合が多い。しかし、文様 d と組み合わせる例は 4 例と少ない。

以上の事実から、文様 b および文様 c は、文様 d とは排他的な関係にあることを指摘できる。

これらの傾向にもとづき、構成パターンを以下の 3 グループに大別することができる。

グループ 1：文様 a のみ（パターン A）

グループ 2：文様 b または文様 c を含み、かつ文様 d を含まない（パターン B・C・D・E・G・J）

グループ 3：文様 d を含む（パターン F・K・L）

各グループに含まれる土器群の数は、グループ 1 が 32 例、グループ 2 が 39 例、グループ 3 が 28 例である。表 4 には各分類群の対応関係を示した。図 8

～ 10 には各グループに属する典型的な資料を示した。

ここで、これらの土器群に伴う文様 e・f、注口土器 A・B について検討する。

文様 e を含む土器群は、パターン A が 11 例、パターン B が 1 例、パターン C が 4 例、パターン D が 2 例、パターン E が 5 例、パターン F が 5 例、パターン J が 7 例、パターン L が 2 例の計 37 例である。グループ 1 およびグループ 2 に含まれる場合が多く、グループ 3 での出現は稀である。

文様 f を含む土器群はパターン A が 3 例、パターン E が 2 例、パターン F が 4 例、パターン J が 1 例の計 10 例である。特定のグループとの親和性は見出だせない。

注口土器 A を含む土器群は、パターン A が 4 例、パターン B が 1 例、パターン F が 8 例、パターン K が 1 例、パターン L が 1 例の計 15 例である。グループ 2 にはほぼ伴わないといえる。

注口土器 B を含む土器群は、パターン F が 4 例、パターン J が 1 例、パターン L が 1 例、の計 6 例である。グループ 3 に特徴的に含まれる土器だといえる。

このように、文様 e、注口土器 A、注口土器 B は各グループを特徴付ける要素であり、以下の分析において補助的な指標とすることができる。

以下、グループ 1 ～ 3 を分析単位とするが、グループ 1 を他の 2 グループと直接比較することはできない。なぜなら、グループ 1 の土器群には、本来グループ 2 やグループ 3 に帰属する土器群から文様 a 以外の要素が欠落した例が含まれている可能性を排除

表 4 分類群対応表

構成パターン	文様				該当する土器群数	グループ
	a	b	c	d		
A	○				32	1
B		○			4	2
C			○		9	2
D	○	○			5	2
E	○		○		12	2
F	○			○	23	3
G		○	○		2	2
H		○		○	0	3
I			○	○	0	3
J	○	○	○		8	2
K	○	○		○	1	3
L	○		○	○	5	3
M		○	○	○	0	3
N	○	○	○	○	0	3

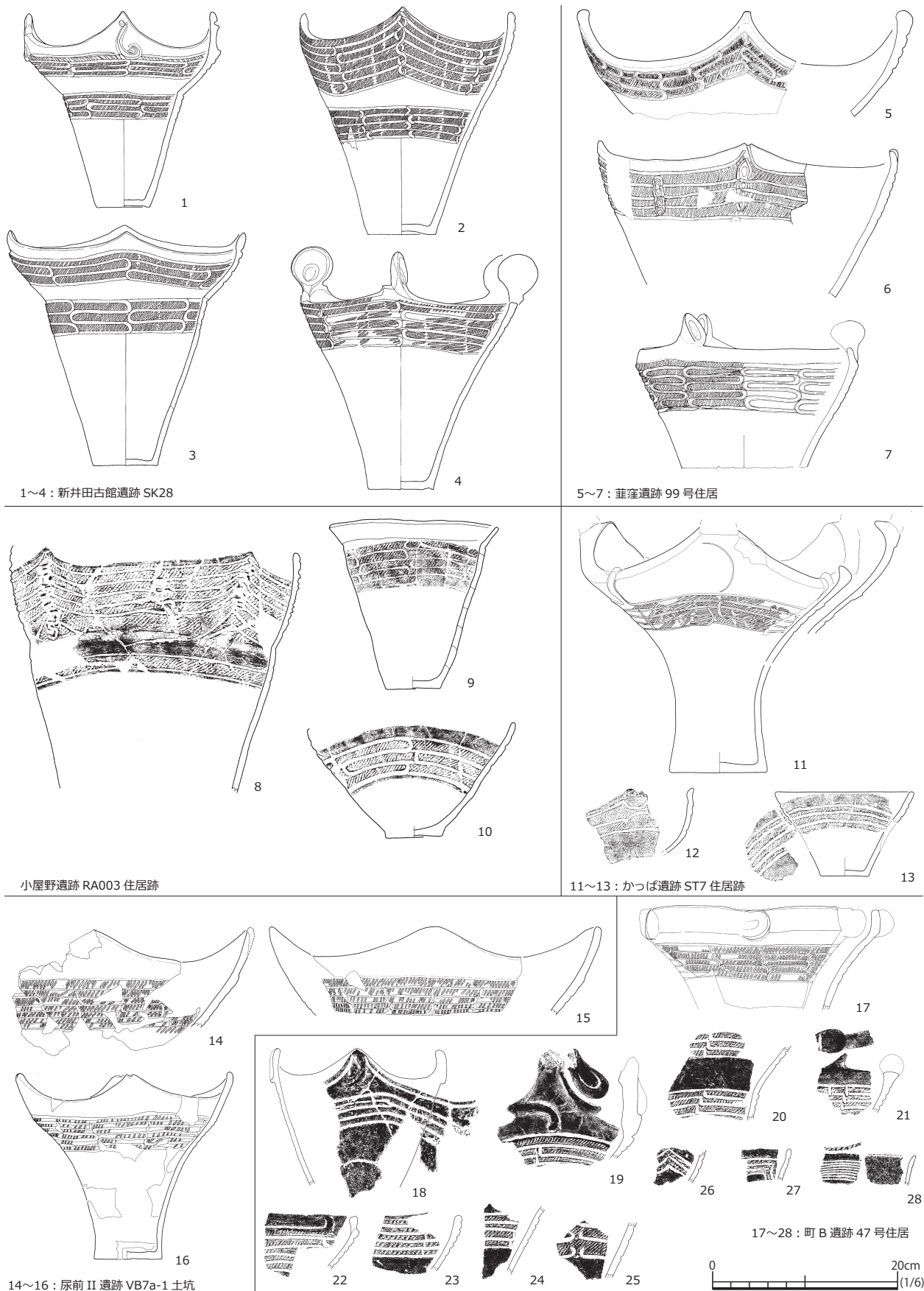


図8 グループ1に含まれる土器群

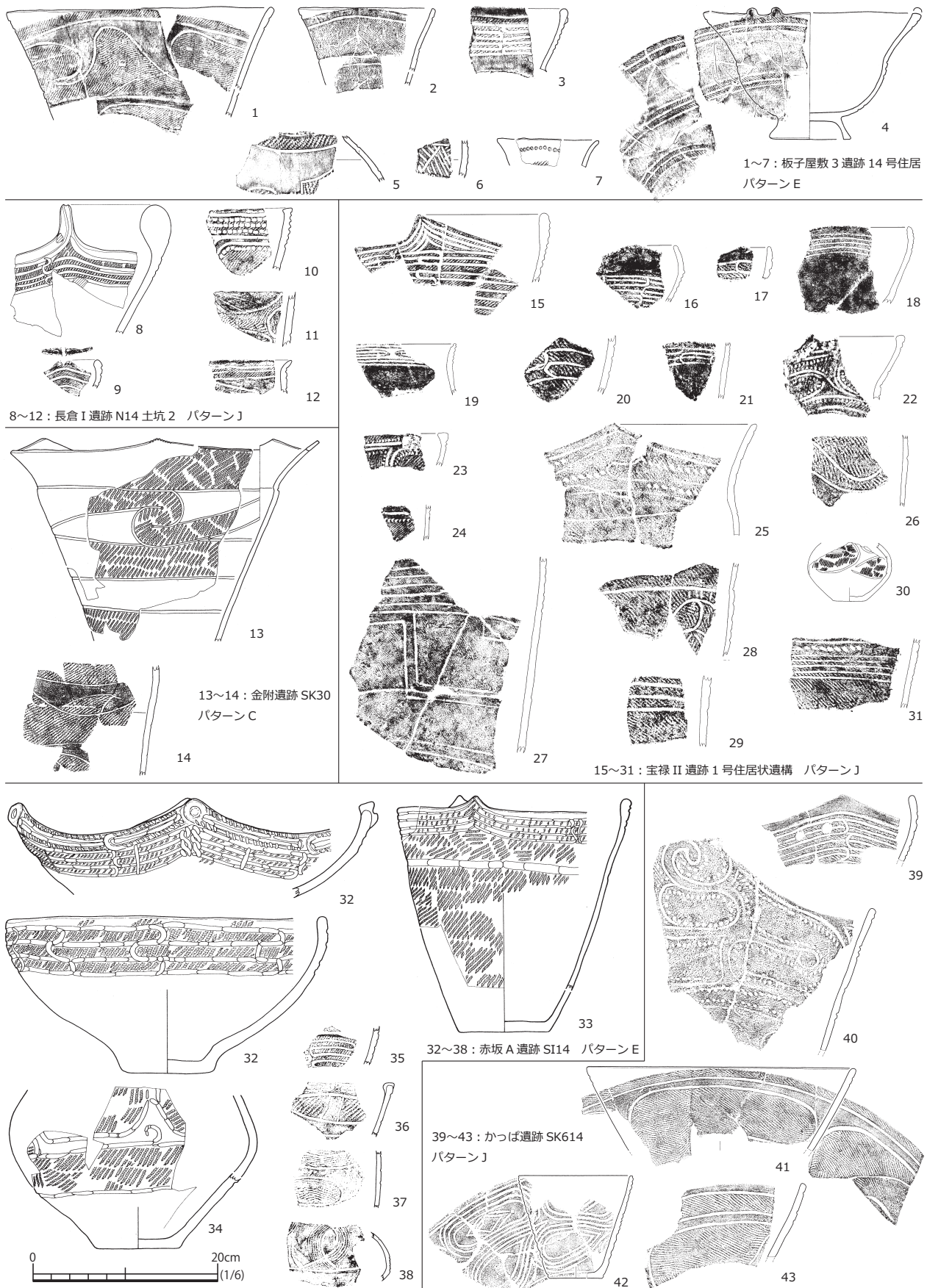


図9 グループ2に含まれる土器群

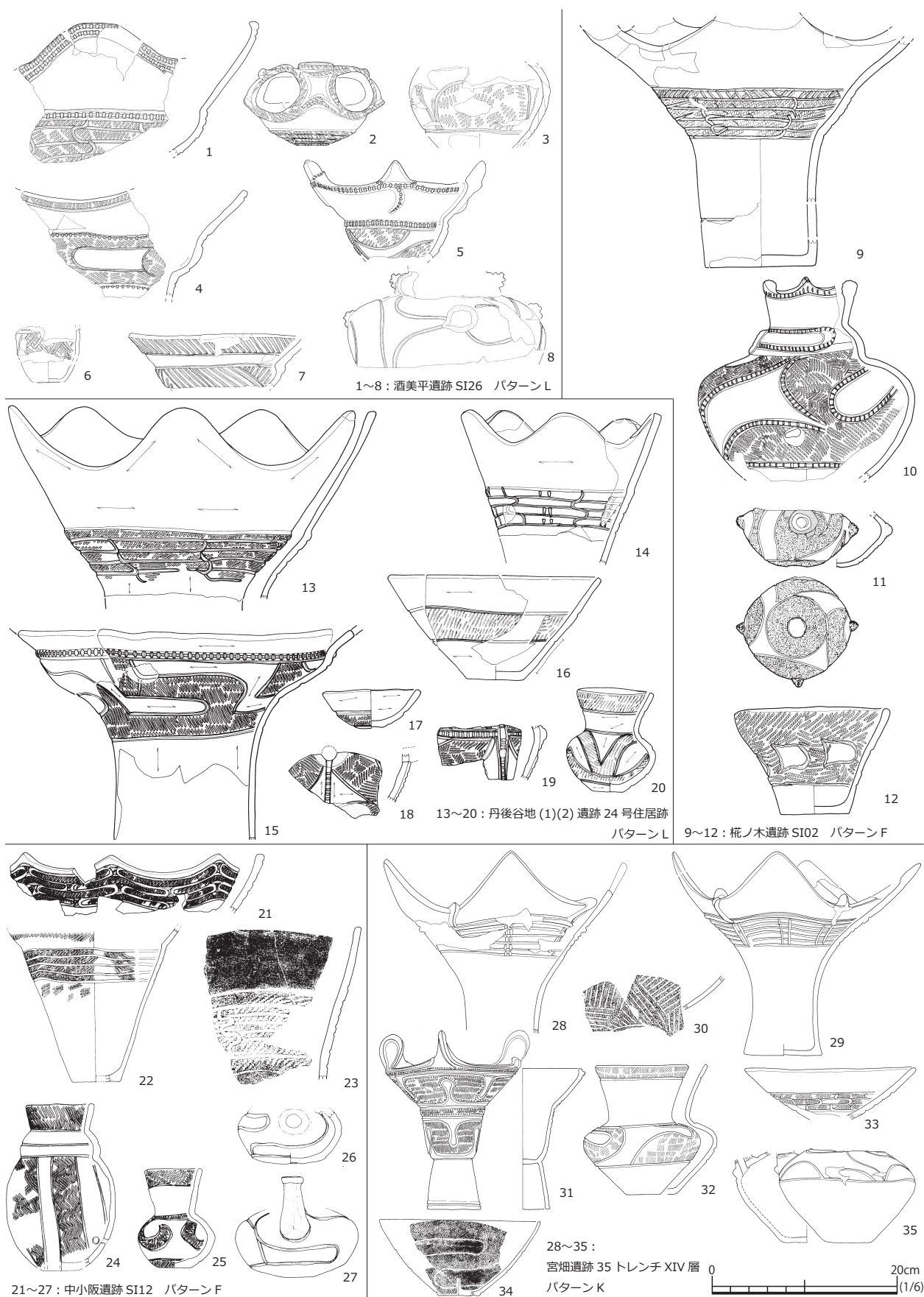


図 10 グループ 3 に含まれる土器群

できないからである。

したがって、以下の分析では主としてグループ 2 とグループ 3 の比較を行う。

4-2. 空間分布の検討

前項の分析で抽出した、グループ 1～3 の分布を図 11 に示した。

グループ 2 とグループ 3 はどちらも東北地方に広く分布しており、特定の分布傾向やグループ間の排他的な関係は認められない。グループ 1 についても同様である。

したがって、グループ間の差異は、東北地方内部における地域差を反映したものとは考えられない。

4-3. 層位的検討

グループ 2 とグループ 3 の層位的関係を把握することのできる事例はきわめて限定される。

秋田県北秋田市漆下遺跡の ST01 捨て場では、41 層・51 層・56 層出土土器がグループ 2 に属する。グループ 2 は 114 層でまとまって出土している十腰内 1 式土器よりも上層で出土するので、十腰内 1 式よりも新しい土器群であることが確認できる。同捨て場でグループ 3 と認定できる土器群は確認されていないが、グループ 2 より上層の 24 層では注口土器 A が出土している（図 12）。注口土器 A はグループ 3 に特

徴的に伴う土器なので、グループ 3 がグループ 2 よりも新しいことを示唆する事例といえる。

宮城県仙台市王ノ壇遺跡では、層位・遺構の重複関係にもとづいて、後期中葉に I～IV 段階の変遷があるとされている（小川・高橋編 2000）。

本稿の分析対象資料でいえば、I 段階には I 区 X 層環状配石遺構、II 段階には I 区 SI101 竪穴遺構・I 区 IX 層 SK128・I 区 IX 層・V 区 IX 層、III 段階には I 区 VII 層が相当する（図 13・14）。

I 段階はグループ 2、II・III 段階はグループ 3 に属するので、グループ 3 はグループ 2 よりも新しいという時間的関係を示す事例といえる。

なお、王ノ壇遺跡の IV 段階は文様 d を有する土器を主体としていることから、文様 d は相対的に新しい要素であるといえる。

福島県郡山市町 B 遺跡の 19 号住居と 20 号住居は重複して検出されており、19 号住居は 20 号住居よりも新しい。19 号住居出土土器はグループ 3、20 号住居出土土器はグループ 2 に属するので、グループ 3 は相対的に新しいことを示している（図 15）。

4-4. 型式学的検討①：深鉢の器形

ここでは各グループ共通して含まれる横帯文をもつ深鉢の器形について検討する。図 16 に器形を把握できる横帯文深鉢を集成した。

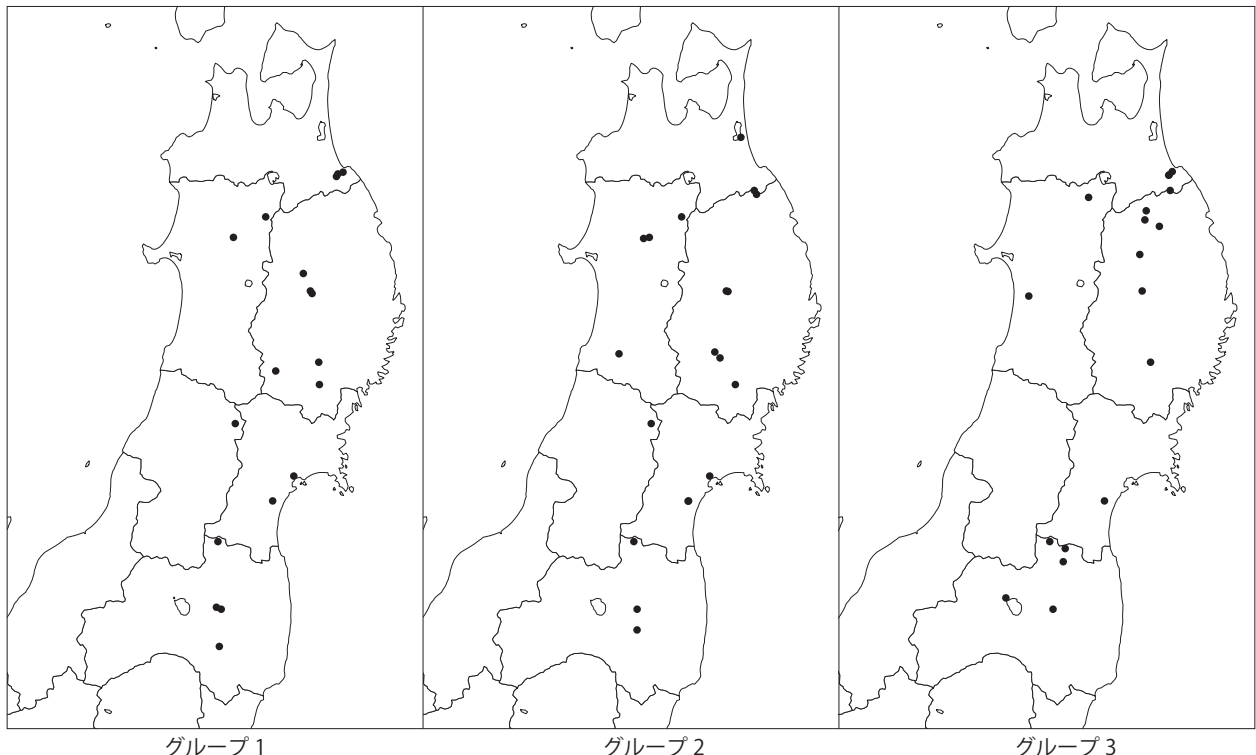


図 11 各グループに含まれる土器群の分布

器形を比較すると、グループ 3 では口頸部が外傾・外反する。傾向が強い。

グループ 2 の深鉢は直線的に立ち上がり、口縁部はそれほど開かない（図 16 の 5・6）。

屈折せず直線的に立ち上がる器形の深鉢は、グループ 2・3 のいずれにもみられる（図 16 の 6・7・10）。

頸部で屈曲する器形の深鉢は両グループに認められるが、屈曲点の直上で膨らむ器形の深鉢はグループ 3 にしかみられない（図 16 の 11・13）。

また、各グループで安定的に組成される波状口縁深鉢は、グループ 2 では 3 単位ないし 4 単位だが、グ

ループ 3 では 4 単位ないし 5 単位となる。

4－5. 型式学的検討②：横帯文

本稿において資料集成の基準とした文様 a、すなわち横帯文は、「横位平行沈線を縦位沈線等で区切った文様」と定義した。しかし、文様 a には多様なバリエーションがある（図 17）。

鈴木克彦は、横帯文には、「上下の平行沈線を L 字で段差状につなぐ」ものと、「平行沈線を括弧や S 字でつなぐ」ものがあり、前者を加曽利 B1 式の文様、後者を東北地方的な文様であることを指摘している（鈴木 2003）。



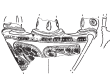


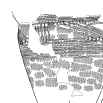







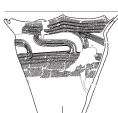

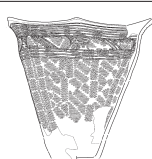



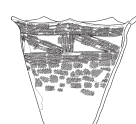
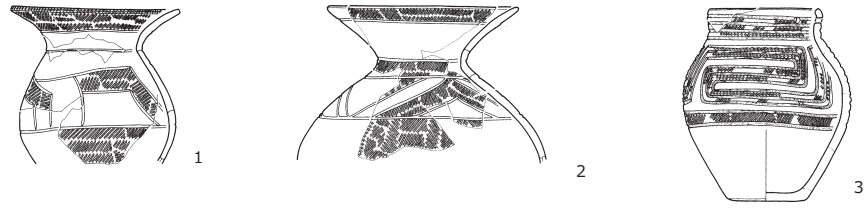
十腰内 1 式	文様 a	文様 b	文様 c	文様 e	注口土器 A	
24 層						
41 層						
49 層						
51 層						
56 層						
73 層						
85 層						
95 層						
114 層						

図 12 漆下遺跡 ST01 捨て場出土土器

I 段階
(環状配石遺構)



II 段階

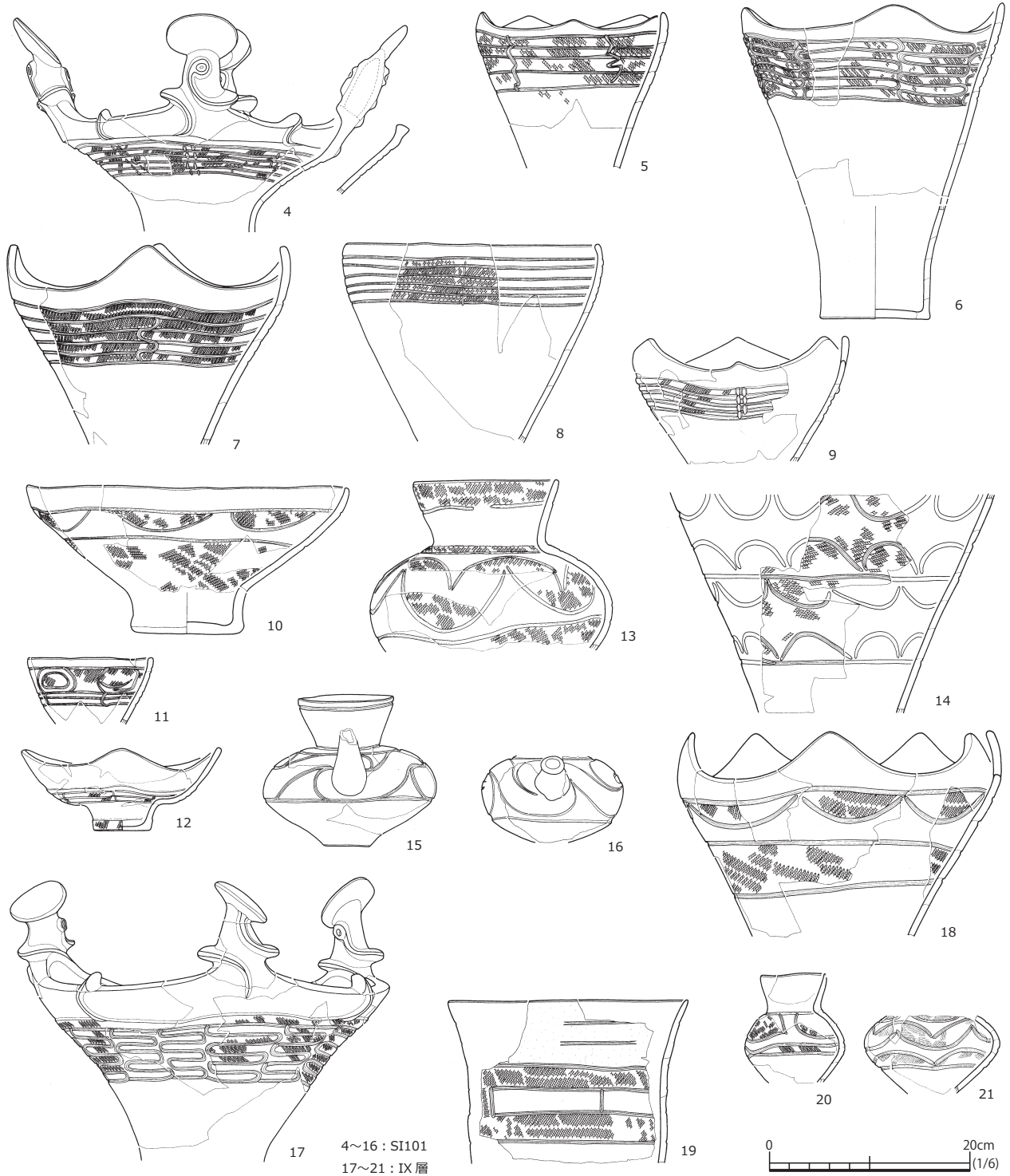
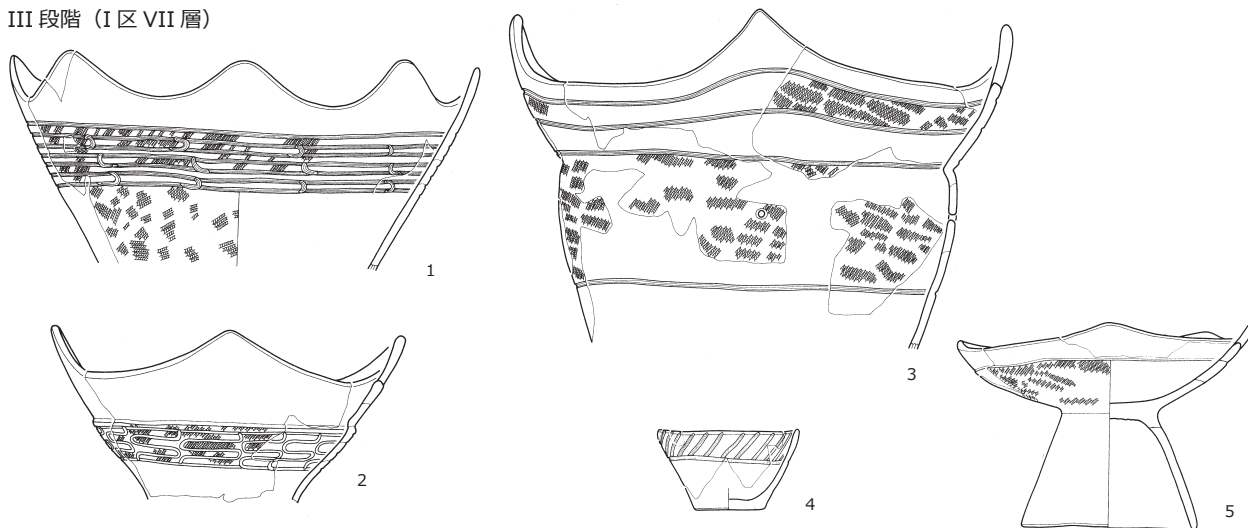


図 13 王ノ壇遺跡出土土器 (1)

III 段階 (I 区 VII 層)



III 段階 (V 区 VII 層)

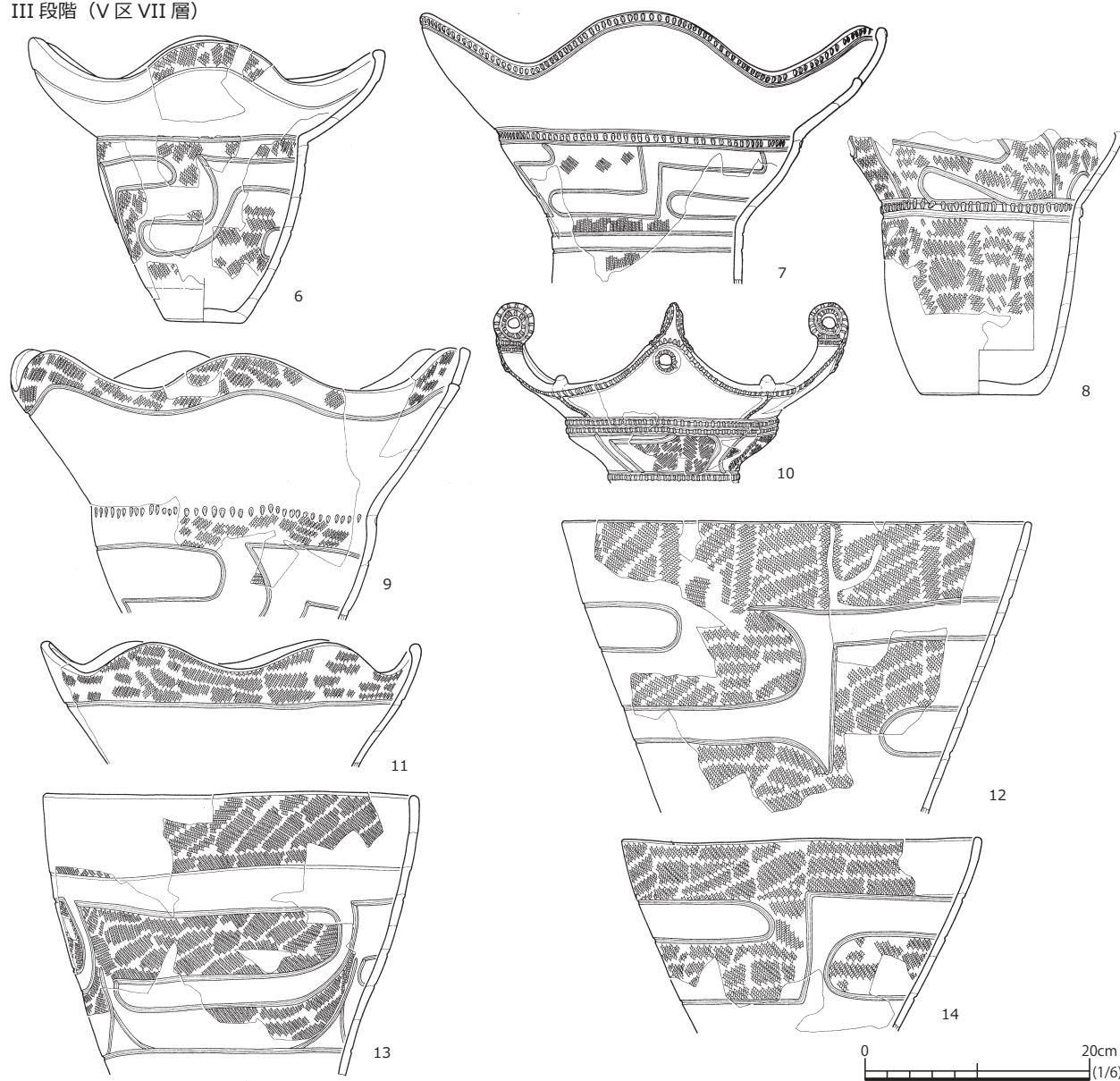


図 14 王ノ壇遺跡出土土器 (1)

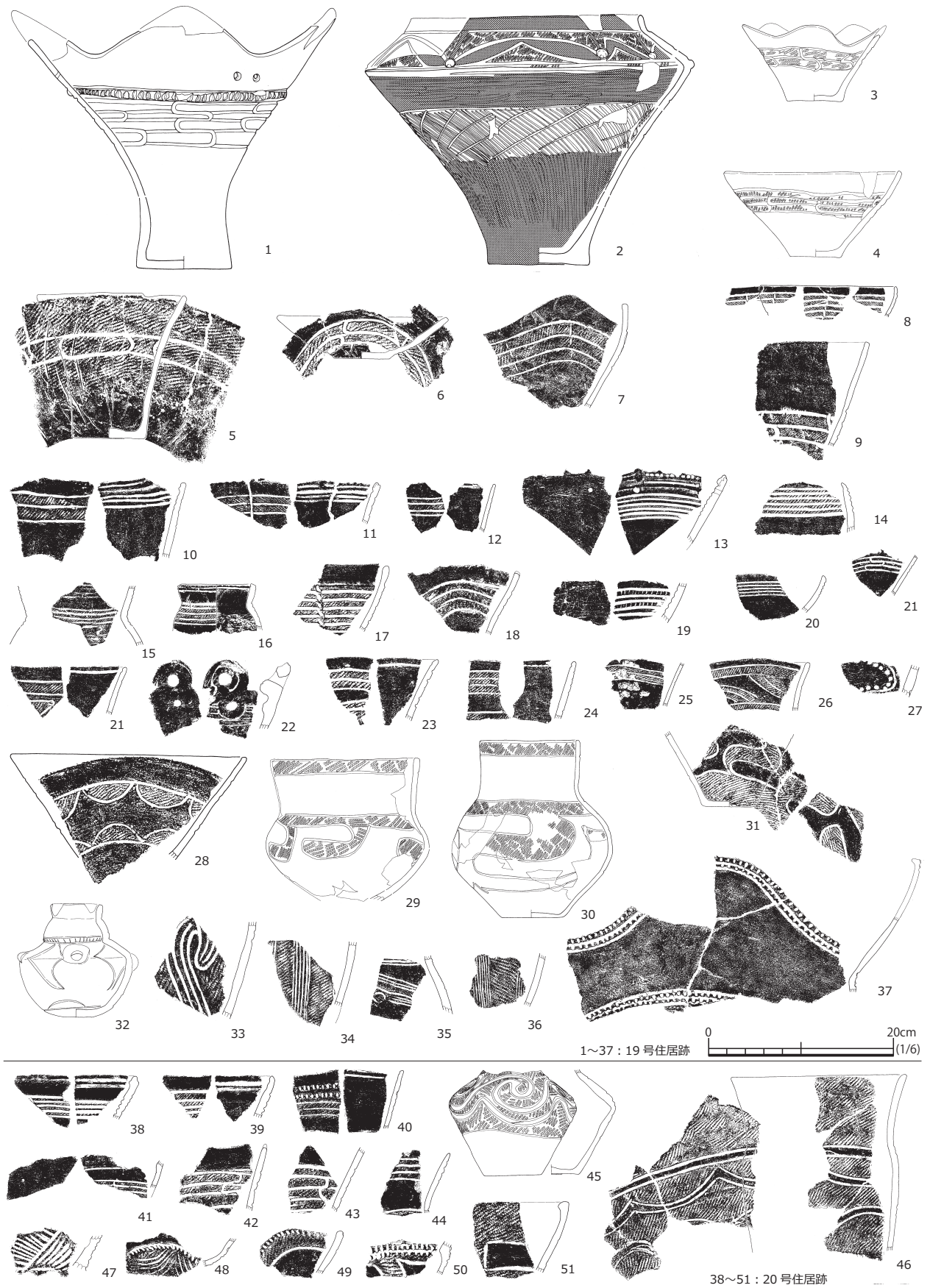
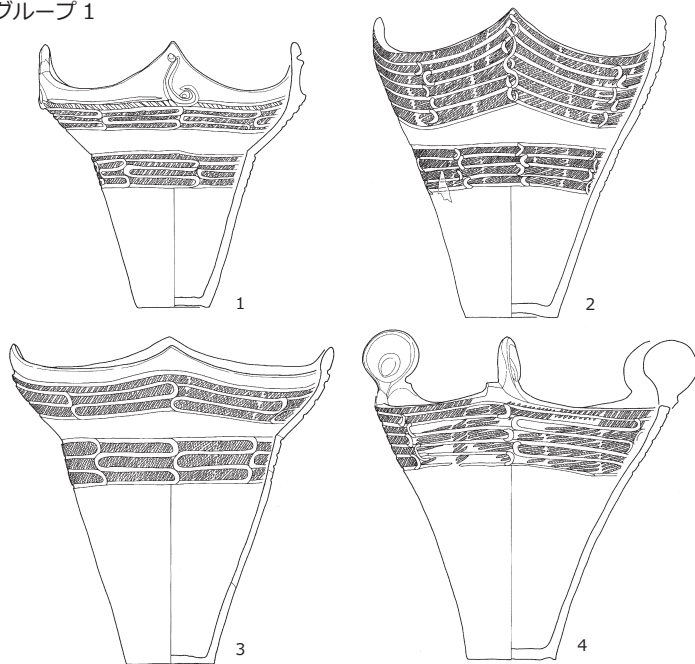
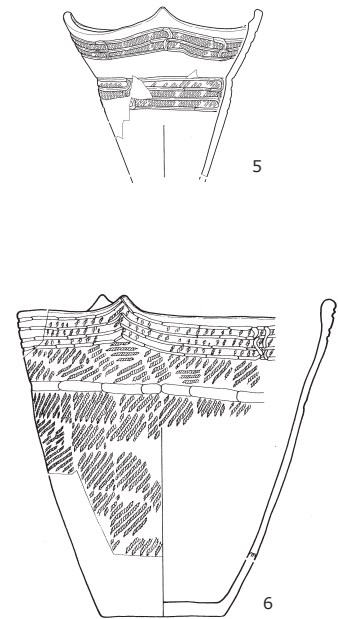


図 15 町 B 遺跡出土土器

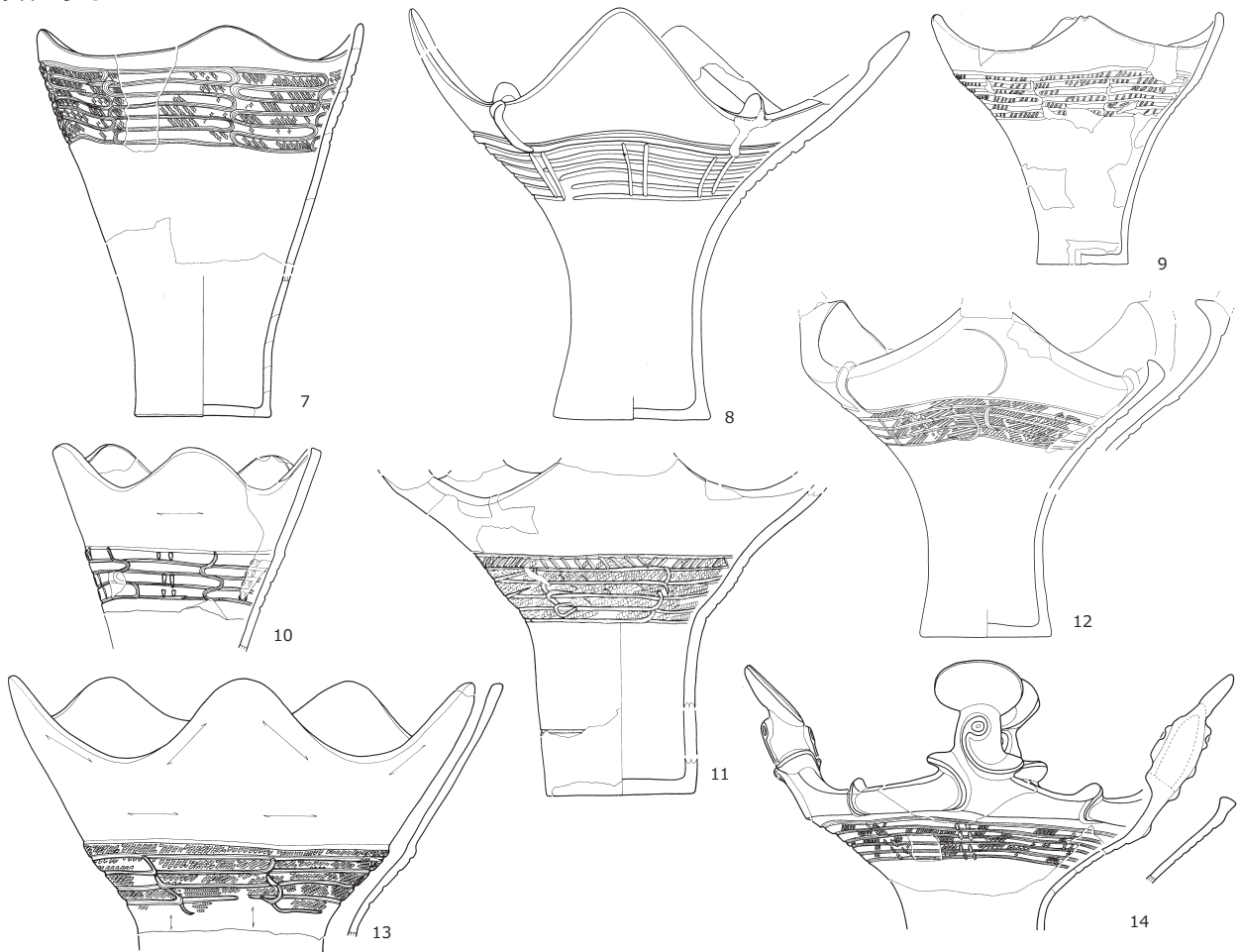
グループ 1



グループ 2



グループ 3



1~4: 新井田古館遺跡 5: 漆下遺跡 6: 赤坂 A 遺跡 7・14: 王ノ塚遺跡 8: 宮畑遺跡 9: 尿前 II 遺跡
10・13: 丹後谷地 (1)(2) 遺跡 11: 梳ノ木遺跡 12: かっぱ遺跡

0 20cm
(1/6)

図 16 横帯文深鉢集成図

図 17 の①が加曽利 B1 式の文様を模式的に示したものであり、図 18 の 19～21 などが相当する。階段状の沈線文を組み合わせることで横帯文を構成することは、加曽利 B1 式の施文原則であることが指摘されており（秋田 1996）、①が加曽利 B1 式の文様であるという認識は妥当である。

図 17 の②・③が東北的な文様に相当する。実際には平行沈線を連絡させるのではなく、楕円形や蛇行沈線を組み合わせて横帯文を構成しているものが多い。

関東の横帯文と東北の横帯文を比較すると、縦位の区切り文で上下の横走沈線が連絡することは共通している。しかし、関東では連絡した下位の沈線が同一方向に進行するが、東北では折り返して逆方向に進行するという差異がある。本稿では、前者を「関東型横帯文」、後者を「東北型横帯」と呼ぶことにする。

ここでいう東北型横帯文は、加曽利 B1 式土器にも一定量含まれるようである。『日本先史土器図譜』で加曽利 B 式（古い部分）とされた中妻貝塚出土土器にも認められる（山内 1939a：図版 26-2）。「区切り弧線文」（大塚 1983）、「交互弧線文」（鈴木 1980）などと呼ばれる区切り手法である。鈴木正博は、これを加曽利 B1d 式（古）として、加曽利 B1 式の中でも相対的に新しく位置づけている（鈴木 1980）。

このように東北型横帯文は、従来加曽利 B1 式の変遷の中でとらえられてきた文様であるが、東北地方におけるあり方が安定的であることから、本来は東北地方を中心に用いられた文様と考えられる。

また、鈴木克彦は内面文様帯をもつ土器の存在にも言及し、やはり東北地方では客体的であり、加曽利 B1 式的な土器であることを指摘している（鈴木 2003）。内面文様帯は、関東地方では前後の時期にも認められるが、加曽利 B1 式で顕著に発達する。関東的な要素といえるだろう。

筆者は、関東型横帯文や内面文様帯をもつ土器について、加曽利 B1 式そのものであると認識している。本稿の分析対象資料中では福島県域の土器群で顕著に認められ、宮城県松島町西ノ浜貝塚でも出土している。

加曽利 B1 式土器を含む土器群はグループ 1 またはグループ 2 に属しており、グループ 3 では認められない。

一方、東北型横帯文は、グループ 1～3 で安定的に認められる。

なお、グループ 3 では東北型横帯文にも多様なバリエーションが生じるとともに、2 個 1 対の短沈線で平行沈線を区切るもの（図 17 の④）、縦位の直線で区切るものなどがある（図 17 の⑤）。④や⑤は関東地方で加曽利 B2 式にみられる対弧文と関連する可能性が高い。

このように、横帯文に着目すると、グループ 2・3 の間には、加曽利 B1 式土器の有無、バリエーションの多寡という差異がある。

4－6．型式学的検討③：文様 d の検討

本稿で文様 d としたクランク状、あるいはかぎ状磨消縄文は、グループ 3 を特徴付ける要素であるとともに、十腰内 2 式に後続する十腰内 3 式を特徴付ける要素でもある。

したがって、グループ 3 が十腰内 3 式に併行することが想定されるが、十腰内 3 式を構成する土器に横帯文は認められない。図 18 に十腰内 3 式の標識資料、典型的な資料である青森県八戸市風張 (1) 遺跡 13 号住居跡出土土器を示した。

グループ 3 は東北地方全域に分布しており、十腰内 3 式との地域差とは考えがたい。

王ノ壇遺跡の層位的事例では、グループ 3（Ⅱ段階・Ⅲ段階）よりも新しいⅣ段階が文様 d を主体とする

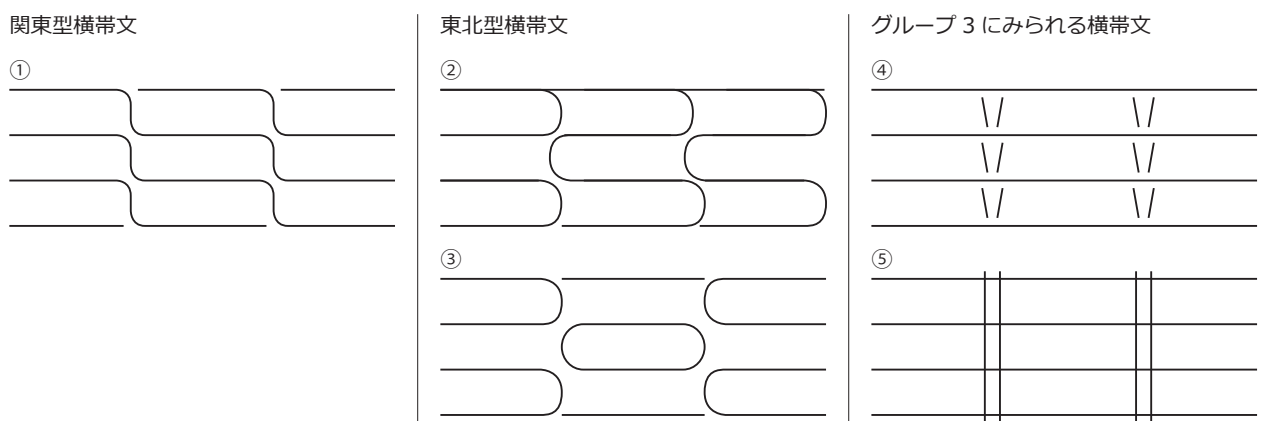


図 17 横帯文模式図

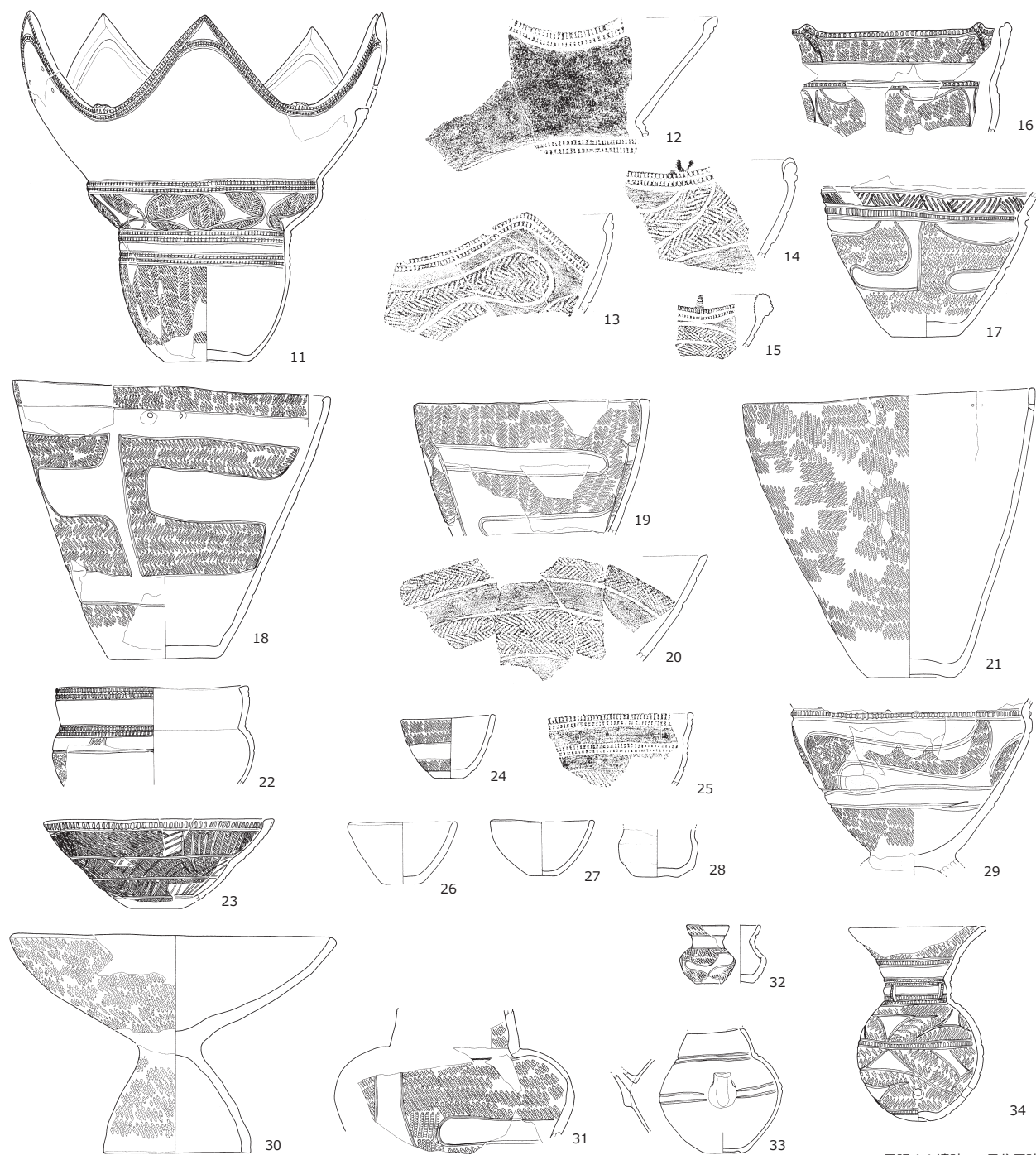
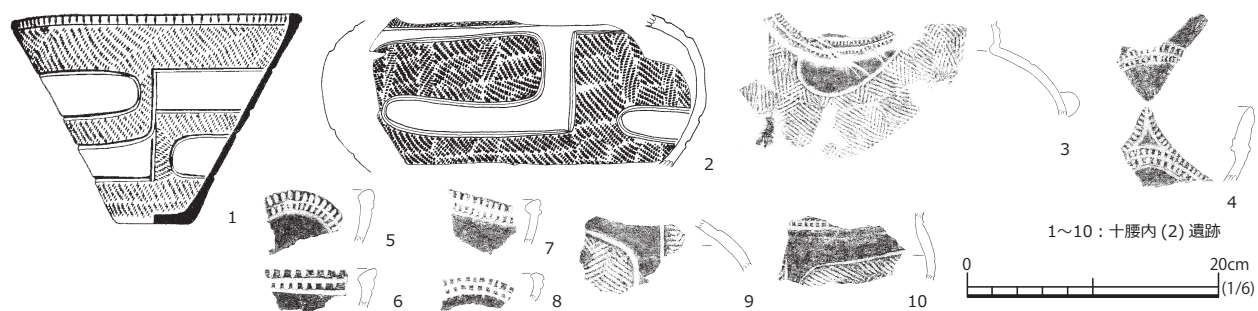


図18 十腰内3式土器

ことから、グループ 3 は十腰内 3 式に先行する土器群であると考えられる。IV 段階が十腰内 3 式に併行するのであろう。

鈴木克彦は十腰内 3 式が横帯文をもたないことを根拠に先行する土器型式として丹後平式や川口 2 式を設定しており（鈴木 1996, 2001）、妥当な判断と評価できる。

文様 d はグループ 3 の段階から十腰内 3 式期まで時間幅のある文様ということになるので、文様 d 単体では時期を決定できないということになる。

ただし、十腰内 3 式の設定時にメルクマールの一つとされた羽状縄文は（今井・磯崎 1968）、グループ 3 の土器群ではほとんど用いられていないので、両者を峻別する指標となる可能性がある。

5. 分析結果にもとづく編年案

5-1. 東北地方内部における地域差

前章 2 節の分析により、土器群の構成パターンからは、東北地方内部での地域差は認められない。つまり、該期の東北地方では、土器の文様に着目する限り、きわめて斉一的な様相を呈している。したがって、本稿で提示する編年案では、基本的に東北地方内部に地域区分を設定しない。

「基本的に」とことわったのは、前章 5 節で分析した横帯文の地域性を考慮したためである。横帯文の特徴から加曽利 B1 式と判断できる土器を含む土器群は東北南部に集中し、本稿の分析対象資料の中では西ノ浜貝塚が北限である。

それでは、加曽利 B1 式が伴うことを東北地方内部における地域差の指標とすることはできるだろうか。確かに、加曽利 B1 式土器の出土は東北南部に多い。しかし、加曽利 B1 式を含む土器群においても東北型横帯文は認められる場合が多い。また、文様 b・c・d が共伴する場合もある。

加曽利 B1 式土器を地域区分の指標とするならば、それは加曽利 B1 式の範疇でとらえるべきである。実際に、福島県域では当該土器群を加曽利 B 諸型式の範疇でとらえるのが一般的である。

しかしながら、東北南部には東北型横帯文や、文様

b・c・d も確実に分布しており、福島県域の土器群を加曽利 B1 式そのもの、あるいはその一類型ととらえることは、必ずしも妥当とはいえない。

また、一括資料ではないため本稿の分析対象には含めていないが、加曽利 B1 式土器は岩手県盛岡市川目 A 遺跡、秋田県由利本荘市片符沢遺跡などにも認められる（図 19）。管見に触れた限りでは青森県域に出土例はない。加曽利 B1 式土器を地域区分の指標とする場合、北限が問題となる。

以上の理由から、加曽利 B1 式土器の共伴を指標として、東北地方に地域区分を設定することはできない。

福島県域のように、加曽利 B1 式土器が、客体的とも言えないような頻度で伴う地域についてはどのようにとらえるべきだろうか。参考となるのが、佐藤達夫の異系統土器論である。佐藤は、西関東では五領ヶ台式直後から勝坂式が成立するまでの間に、異系統土器が同時共存する複雑な様相を明らかにしており、異系統土器の共存は特殊例ではなく、むしろ地域的・時期的にかなり普遍的な現象であることを指摘している（佐藤 1974）。時期・地域を異にしているが、後期中葉の福島県域を同様に理解することは、決して突飛な議論ではない。

本稿では、後期中葉においては東北地方全域を単一土器型式の分布圏として把握する立場をとる。しかし、それは隣接する加曽利 B 諸型式との排他的な分布を必ずしも意味しない。後期中葉の東北地方南部には、加曽利 B 諸型式との主客を断じ得ない異系統共存圏が存在するものと理解する。

東北地方内部の地域区分について、鈴木克彦は筆者とは全く異なる立場をとっている。鈴木は、後期中葉の東北地方北部、中部、南部にそれぞれ異なる土器型式を設定している（鈴木 1996, 2003, 2005）。東北地方の後期中葉土器群は同じ文様をもち、概ね同じ変遷をたどるが、土器群を構成する文様の比率に地域差があるのだという。鈴木によれば、東北の後期中葉土器群は a 類文様（十腰内 II 群土器の a 類、本稿の文様 a、横帯文）および b 類文様（十腰内 II 群土器の b 類、本稿の文様 b・c・d）からなり、b 類文様が相対的に多く、中部以南では a 類文様が相対的に多いという（鈴

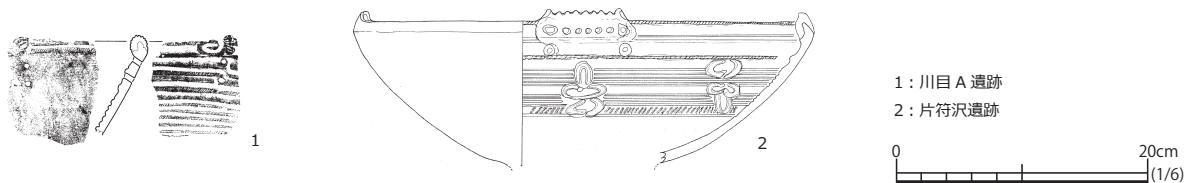


図 19 東北地方北半における加曽利 B1 式土器の出土例

木 2003)。そして、福島県域は加曽利 B 諸型式が顕著に伴うことから区別しているようだ。

筆者は、以下 3 点の理由から鈴木 of 地域区分には首肯しかねる。

第 1 に、相対的な比率が区分の指標となるのであれば、定量的なデータを示し、区分の指標となる基準値を示すべきである。筆者の知る限り、鈴木はそうした分析を公表していない。

第 2 に、構成要素の相対的な組成比率は土器型式のメルクマールとして不便である。土器型式を設定する目的は、資料の時空間的な帰属を決定することである。しかし、組成比率をメルクマールとする場合、個体資料を特定土器型式に比定することは原理的に不可能である。例えば、東北北部で製作された土器 1 個体が、搬出された結果として東北中部以南で出土したとしても、それが非在地的な土器であることを資料の観察から判断することはできない。本来の分布範囲以外では、本来の組成比率を保った状態で欠落なく搬出されたことを担保できるコンテクストをもつ土器群でなければ、型式を特定できない。

組成比率を適切に評価できる土器群にしか適用できない土器型式が研究上有用であるとは考えられない。

第 3 に、福島県域を中心とした東南北部を区分する指標として加曽利 B 諸型式を用いるのは不適切である。加曽利 B 諸型式を指標とするのであれば、その対象は加曽利 B 諸型式の範疇でとらえられるべきである。また、加曽利 B1 式は鈴木 of いう東北中部や北部にも点在しており、空間的範囲の認定に問題がある。

以上の理由から、本稿では鈴木 of 地域区分を採用しない。

5-2. 時間的關係の検討

前章 3 節における層位的事例の検討から、グループ 3 はグループ 2 よりも新しいと考えられる。層位的事例はきわめて限定的であり、継続的な検証作業が必要であることは言うまでもないが、現段階では最も蓋然性の高い位置づけといえる。

器形・文様に関する型式学的検討からも、グループ 3 はグループ 2 よりも相対的に十腰内 3 式併行期の土器群に近似する。図 20 にはグループ 2、グループ 3、十腰内 3 式併行期について、型式学的特徴の存否を示した。グループ 2 とグループ 3 は、横帯文というメルクマールを共有しつつも、他の要素に着目すると、明瞭な差異が存在する。山岸英夫が「横帯文は時間幅のある文様であり、時期決定の根拠とはならない」と指摘したことは（山岸 2005）、卓見であったといえよう。グループ 3 は、むしろ十腰内 3 式と共通する要素をもつといえる。したがって、グループ 2 → グループ 3 → 十腰内 3 式併行期という序列は、各要素の消長から合理的といえる。

なお、グループ 1 に属する土器群については、グループ 2・3 に帰属する横帯文をもつ土器の特徴から、編年上の位置づけが可能と考えられる。

5-3. 関東地方との併行関係

グループ 2・3 のうち、加曽利 B1 式土器が直接相伴するのはグループ 2 にほぼ限定されることから、グループ 2 を加曽利 B1 式併行とみなすことができる。また、グループ 3 に属する町 B 遺跡 19 号住居で出土している算盤玉形土器は（図 15 の 2）、屈曲部より上位の連続する弧線文や、下位の斜行沈線文などから

	グループ 2	グループ 3	十腰内 3 式
関東的横帯文			
東北的横帯文			
2 個 1 対の区切り文			
文様 b・c			
文様 d			
文様 e			
注口土器 A			
5 単位波状口縁			
口頸部の強い外傾			
屈曲部の膨らみ			

図 20 土器群を特徴づける要素の消長

も典型的な加曽利 B2 式土器といえる。したがって、グループ 3 は加曽利 B2 式併行と考えられる。

本稿では直接分析対象としていないため、共伴例を提示しないが、後続する十腰内 3 式併行期を加曽利 B3 式併行と位置づけたい。第 2 章で述べたように、文様 d が加曽利 B2 式とされる土器にみられることから（図 5）、十腰内 3 式を加曽利 B2 式併行とする見解があるが（関根 2005）、文様 d はグループ 3 の段階から十腰内 3 式併行期まで時間幅をもつ文様なので、併行関係の根拠とは認めがたい。

さらに、グループ 2・3 を分離するメルクマールのいくつかは、加曽利 B1 式・B2 式の差異に調和的である。

まず器形についてであるが、加曽利 B1 式は設定時に「頸部に彎曲の無い、又は著しくない深鉢形又は鉢形」という器形が特徴とされた（山内 1937a）。一方、加曽利 B2 式土器は設定時に「深鉢は器形の差が大きい、底の甚だ小さなものは少なく、中には体下半筒形を呈し、比較的大きな底を有するものもある」という特徴が指摘されている（山内 1937b）。

これらの特徴は、グループ 2・3 とそれぞれ調和的であり、本稿の示した併行関係の蓋然性を裏付ける。

しかしながら、加曽利 B1 / B2 式の境界付近では、さらなる検討を要する。

山内清男が加曽利 B2 式の設定にあたり標式とした資料の主体は、遠部包含地の土器塚出土土器であり（池上 1937）、キザミの多用と綾杉文を特徴とする（山内 1939b）。しかし、遠部包含地と加曽利 B1 式の間には型式学的な不連続が指摘され、遠部包含地に先行する段階をめぐる論戦が繰り返され、未だに決着をみていない。ここで研究史を詳述することは出来ないが、大略遠部以前の土器を加曽利 B2 式古段階と位置付ける見解と（安孫子 1988,1989；大塚 1984 など）、加曽利 B1-2 式として中間型式を設定する見解とに収斂する（鈴木 1980,1981）。大塚達朗は、加曽利 B1 式後半の分析を通じて、B1-2 式が B1・B2 式の枠組みでとらえられものと批判している（大塚 1983）。いずれにせよ、遠部以前の段階が存在することは共通の理解といえよう。

本稿では、加曽利 B1 / B2 式の境界は、3 単位突起深鉢で体部が括れる段階以降が加曽利 B2 式ととらえる秋田かな子の見解にしたがう（秋田 2008）。山内は、IIa 文様帯の出現は加曽利 B2 式としており（山内 1964）、秋田の区分案とは整合性がある。

本稿のグループ 2 とグループ 3 を比較すると、括れのある深鉢はグループ 3 に多く、概ね整合する。

グループ 2 にも括れのある深鉢は存在しており、グループ間で多少の出入りもありうる。しかし、青森県八戸市新井田古館遺跡 SK28（図 8 の 1～4）のように、括れた深鉢と直線的に立ち上がる深鉢が確実に共伴している例もあり、型式学的な境界を決定することは容易ではない。本稿でこれ以上踏み込んだ議論することはかなわず、検討課題の提示にとどめる。

5-4. 編年案

以上の検討にもとづき、東北地方後期中葉の土器群を以下の 3 段階でとらえる編年案を提示する。図 21 には各段階の代表的な資料を示した。

第 1 段階：グループ 2 の土器群によって特徴づけられる段階である。横帯文（文様 a）をもつ土器、入り組んだ磨消縄文をもつ土器（文様 b・c）、多重沈線文をもつ土器（文様 e）などにより特徴付けられる。従来の十腰内 2 式の一部に相当し、四ツ石式の内容も含んでいる。加曽利 B1 式に併行する。

第 2 段階：グループ 3 の土器群によって特徴づけられる段階である。横帯文をもつ土器、大ぶりの磨消縄文（文様 d）をもつ土器、宝ヶ峯型注口土器などにより特徴付けられる。鈴木克彦の設定した丹後平式・川口 2 式等に相当し（鈴木 1996,2001）、加曽利 B2 式に併行する。

第 3 段階：十腰内 3 式期に相当する段階である。大ぶりの磨消縄文によって特徴付けられ、加曽利 B3 式に併行する。

本稿の結論として、後期中葉の東北地方全域を 3 段階の変遷でとらえた編年案を提示する。これにより、第 3 章第 1 節で述べた 4 つの論点についても一定の見解を示すことができたと考えている。

論点①の十腰内 1 式 / 2 式間に介在する土器型式については、分析の結果十腰内 2 式との明瞭な分離は認められなかった。四ツ石式とされた土器群は、十腰内 2 式の一部とともに第 1 段階に含まれる。

論点②の、十腰内 2 式 / 3 式間に介在する土器型式については、鈴木克彦の設定した丹後平式等の段階の存在を追認した。本稿における第 2 段階が相当する。

論点③の空間分布については、先行研究とは異なり、後期中葉においては東北地方全域を単一土器型式の分布圏として把握する見解を提示した。

論点④の十腰内 2 式が加曽利 B1 式と加曽利 B2 式

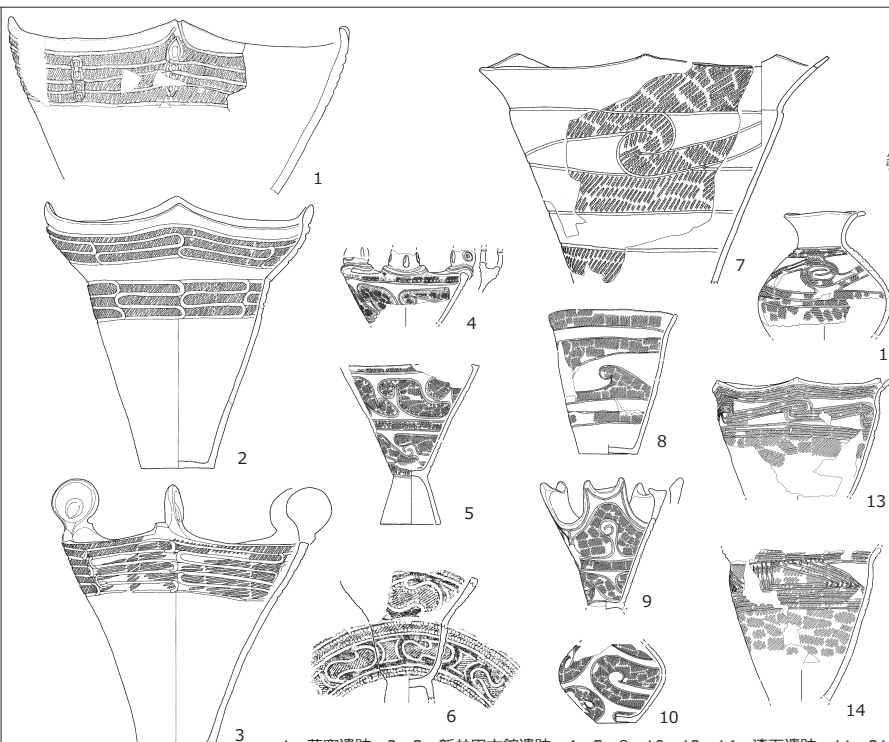
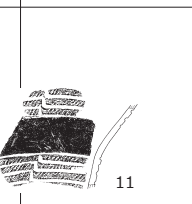
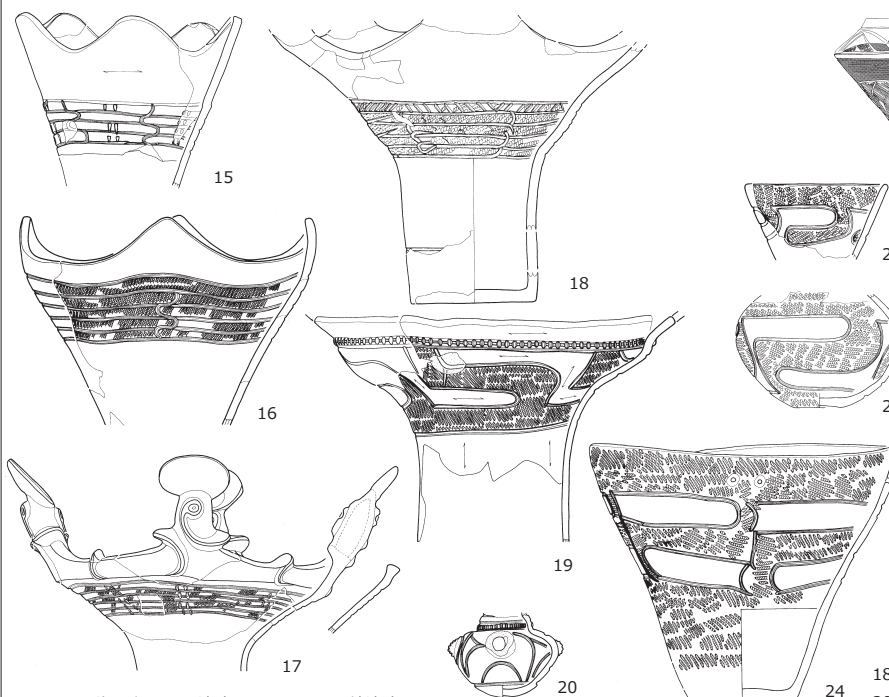
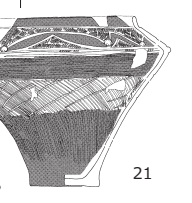
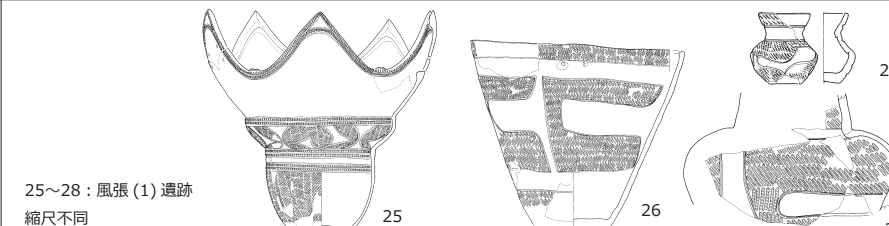
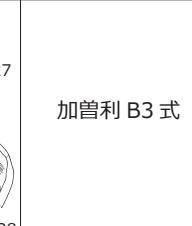
	東北地方	関東地方
後期中葉 第 1 段階	 <p>1: 葦窪遺跡 2・3: 新井田古館遺跡 4・5・8~10・12~14: 漆下遺跡 11・21: 町 B 遺跡</p>	 <p>加曽利 B1 式</p>
後期中葉 第 2 段階	 <p>15・19: 丹後谷地 (1)(2) 遺跡 16・17: 王ノ壇遺跡 18: 柵ノ木遺跡 20・22~24: 丹後平 (2) 遺跡</p>	 <p>加曽利 B2 式</p>
後期中葉 第 3 段階	 <p>25~28: 風張 (1) 遺跡 縮尺不同</p>	 <p>加曽利 B3 式</p>

図 21 東北地方における縄文後期中葉の土器編年

のいずれに併行するのかという問題については、丹後平式等の段階を追認することで解決策としたい。すなわち、十腰内 2 式とされてきた土器群には加曽利 B1 式に併行する部分と加曽利 B2 式に併行する部分とが存在していたのである。

設定した各段階は土器型式名を付して呼称すべきであるが、本稿では既存のいずれの型式とも異なり、東北地方全域を単一土器型式でとらえる立場をとっている。したがって、どの型式名を用いるにしても、従来とは大幅に異なる内容となってしまうため、型式名を付すことは避けたいと思う。

6. おわりに

本稿で提示した編年案は、土器群変遷の序列については概ね先行研究を追認したものである。しかし、空間的範囲については、従来の見解とは異なり、東北地方全域を単一土器型式圏ととらえた。本稿の分析結果から、既存の十腰内諸型式や宝ヶ峯式、宮戸 2a・2b 式などは、型式としての内実に差異はないと考えた。筆者の経験・力量が至らず、看過してしまった地域差もあるのかもしれないが、汎列島のな広域編年を整備する上では、ある程度大きな単位で地域間を比較することが有効であろう。

また、東北地方を単一の土器型式圏ととらえることは、地域性の存在を否定するものではない。とりわけ、今回分析対象とはしていないが、粗製土器には地域性が認められるのではないかと予想している。

東北地方は広大な空間であり、生態的条件も非常に多様である。当然適応形態も異なり、異なる文化が形成されたことが予想される。実際、後期前葉以前には土器にも明瞭な地域差が認められる。そうした多様性にもかかわらず、突如齊一的な土器型式圏に統合されることになるので、受け入れがたい感も強い。しかし、この齊一性こそが当該土器群を特徴づける要素なのであり、いかにして齊一性を有するに至ったのか、その背景となる社会の変容を明らかにすることが今後の課題である。

謝辞

本稿の作成にあたり、設楽博己先生から御指導を賜った。大貫静夫先生、佐藤宏之先生からは談話会での発表に際し、御助言をいただいた。また、下記の諸氏・諸機関から御助言・御協力をいただいた。末筆ではございますが、記して感謝いたします。

伊藤格 太田圭 金子昭彦 菅野紀子 小林圭一
工藤司 佐藤信輔 関根達人 中門亮太 長尾正義
長谷川大旗 堀江格 三浦一樹 渡則子
秋田県埋蔵文化財センター 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 御所野縄文博物館 じょーもぴあ
宮畑 仙台市教育委員会 八戸市博物館 八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館 弘前市教育委員会 福島市振興公社文化財調査質 三沢市教育委員会 (50 音順・敬称略)

参考文献

- 青森県史編さん委員会編 2013 『青森県史：資料編 考古 2 (縄文後期・晩期)』青森県
秋田かな子 1996 「南関東西部の様相」『後期中葉の諸様相』縄文セミナーの会, 1-18
秋田かな子 2008 「加曽利 B 式土器」小林達雄編『総覧 縄文土器』アム・プロモーション, 594-603
秋元信夫編 1994 『赤坂 A 遺跡』鹿角市文化財調査資料 50
安孫子昭二 1988 「加曽利 B 様式土器の変遷と年代 (上)」『東京考古』6: 1-33
安孫子昭二 1989 「加曽利 B 様式土器の変遷と年代 (下)」『東京考古』7: 29-74
新屋雅明 2015 『縄文時代後・晩期土器編年の研究：加曽利 B 式～安行式土器群の変遷』六一書房
池上啓介 1937 「千葉縣印旛郡白井町遠部石器時代遺蹟の遺物」『史前学雑誌』3(9): 1-32
泉田健・松本昌樹編 2000 『上野遺跡』秋田県文化財調査報告書 295
磯崎正彦 1964 「後期の土器」『日本原始美術 1』講談社, 165-168
今井富士夫・磯崎正彦 1968 「十腰内遺跡」『岩木山：岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』岩木山刊行会, 316-388
伊東信雄 1957 「宮城県古代史」『宮城県史 1』宮城県, 1-171
岩手県埋蔵文化財センター 1984 『川口 II 遺跡発掘調査報告書：国道 4 号川口バイパス関連遺跡発掘調査』岩手県埋文センター文化財調査報告書 84
大塚達朗 1983 「縄文時代後期加曽利 B 式土器の研究 (1)」『東京大学考古学研究室研究紀要』2: 181-227
大塚達朗 1984 「寿能泥炭層遺跡出土の加曽利 B 式土器の様相」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書 (人口遺物編)』埼玉県立博物館・埼玉県教育委員会, 821-830
大野亨他編 2001 『酒美平遺跡 II』八戸市埋蔵文化財調査報告書 88
岡田康博 1986 「十腰内第 III 群・第 IV 群・第 V 群土器の再検討」『弘前大学考古学研究』3: 37-53
小川淳一・高橋綾子編 2000 『王ノ壇遺跡』仙台市文化財調査報告書 249
押山雄三・高松俊雄編 2005 『阿武隈川築堤関連 町 B 遺跡』郡山市教育委員会
主濱光朗他編 2013 『伊古田遺跡・大野田古墳群・下ノ内遺跡』仙台市文化財調査報告書 413

- 葛西勲 1987 『青森市四ツ石遺跡調査報告』青森山田高等学校考古学研究部
- 加藤朋夏・加藤竜編 2010 『智者鶴遺跡』秋田県文化財調査報告書 454
- 金子昭彦 1993 「考察」『新山権現社遺跡発掘調査報告書』財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター, 405-467
- 金子昭彦 1994a 「東北地方北半部における縄文時代後期中葉の土器: 新山権現社遺跡 III 群 1 ～ 3 群土器」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』14: 1-34
- 金子昭彦 1994b 「十腰内 III 式と IV 式の境界: 東北地方北半部における縄文時代後期中葉から後葉への土器変遷」『岩手考古学』6: 1-22
- 金子昭彦 1999 「東北地方 後期前半」『縄文時代』10(第 1 分冊): 141-148
- 金子昭彦・高木晃編 2006 『金附遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 482
- 菅野美香子他編 2011 『漆下遺跡』秋田県文化財調査報告書 464
- 菊池貴広編 2002 『浅石遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 403
- 工藤竹久他編 1986 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書 II: 丹後谷地遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書 15
- 工藤竹久他編 1989 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書 VII: 丹後平遺跡 (2)・丹後谷地遺跡 (4)・笹子遺跡 (3)』八戸市埋蔵文化財調査報告書 27
- 工藤徹・工藤利幸編 1999 『野沢 IV 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 294
- 工藤泰博ほか編 1984 『葦窪遺跡: 東北縦貫自動車道八戸線関係埋蔵文化財調査報告書 7』青森県埋蔵文化財調査報告書 84
- 小久保拓也編 2008 『新井田古館遺跡: 宅地造成・集合住宅建設に伴う発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書 116
- 後藤勝彦 1957 「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器編年について」『塩釜市教育委員会教育論文』2: 1-6
- 後藤勝彦・斎藤良治編 1967 『新産業団地指定地区埋蔵文化財緊急発掘調査等報告書』宮城県文化財調査報告書 13
- 小林圭一 2015 「国宝『合掌土偶』の編年の位置: 風張 (1) 遺跡第 15 号竪穴住居跡出土土器の検討を通して」『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』14: 23-104
- 小林行雄 1933 「先史考古学に於ける様式問題」『考古学』4(8): 223-228
- 斎藤義弘他編 2004 『宮畑遺跡 (岡島) 確認調査報告書』福島市埋蔵文化財調査報告書 173
- 酒井宗孝編 1999 『尿前 II 遺跡 A 地区発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 288
- 佐藤達夫 1974 「土器型式の実態: 五領ヶ台式と勝坂式の間」日本歴史学会編『日本考古学の現状と課題』吉川弘文館, 81-102
- 佐藤常雄ほか編 2002 『阿武隈川築堤関連 築場遺跡 皆屋敷遺跡 町 A 遺跡』郡山市教育委員会
- 鈴木克彦 1996 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究: 十腰内 2 式土器の研究」『考古学雑誌』81(4): 1-57
- 鈴木克彦 1997 「注口土器の研究」『青森県埋蔵文化財センター研究紀要』2: 1-38
- 鈴木克彦 2001 「岩手県の後期前葉土器の編年: 葦内 A・B 式、川口 2 式」『岩手考古学』13: 1-22
- 鈴木克彦 2003 「宝ヶ峯式土器の研究: 宝ヶ峯様式の細別」『縄文時代』14: 63-96
- 鈴木克彦 2005 「東北南部後期前・中葉の番匠地編年の再検討」『縄文時代』16: 47-78
- 鈴木克彦 2008 「宝ヶ峯式・手稲式土器」小林達雄編『総覧 縄文土器』アム・プロモーション, 552-559
- 鈴木正博 1980 「大森貝塚『土器社会論』序説」『大田区史: 資料編 考古 II』大田区 pp.458-465
- 鈴木正博 1981 「遺物特論 II: 加曽利 B 式 (古) 研究序説」『取手と先史文化』下, 1-148
- 須原拓編 2009 『宝禄 II 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 541
- 関根達人 2005 「『十腰内 III・IV・V・VI 群土器』に関する今日的理解」『北奥の考古学』葛西勲先生還暦記念論文集刊行会, 161-176
- 高木晃他編 2012 『川目 A 遺跡第 5 次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 589
- 高木政光他編 1990 『東北横断自動車道遺跡調査報告 8』福島県文化財調査報告書 240
- 鷹野光行 1978 「北海道における縄文時代後期中葉の土器の編年について」『考古学雑誌』63(4): 41-56
- 田島一雄他編 1992 『小田内沼 (1)・(4) 遺跡発掘調査報告書』三沢市埋蔵文化財調査報告書 10
- 谷藤保彦・関根慎二編 2001 『記録集 後期後半の再検討』縄文セミナーの会
- 千葉正彦・菊池賢編 2003 『久田遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 406
- 富樫泰時他編 1980 『片符沢遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書 72
- 中田迪編 2001 『市部内遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 350
- 中村絵美他編 2008 『板子屋敷 3 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 537
- 西村広経 2016 「東北地方の異形台付土器」『八戸市埋蔵文化財センターは川縄文館研究紀要』5: 15-27
- 濱田宏他編 2012 『小屋野遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 596
- 福永将大 2017 「縄文時代後期広域土器分布圏の変遷とその特質: 器種構成の時空間的検討を通して」『考古学研究』63(4): 37-59
- 藤田亮一他編 1984 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査書: 田面木平遺跡 (1)』八戸市埋蔵文化財調査報告書 13
- 藤田亮一他編 1991 『八戸市内遺跡発掘調査報告書 2: 風張 (1) 遺跡 I』八戸市埋蔵文化財調査報告書 40
- 星雅之・中川重紀編 2000 『長倉 I 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 336
- 水戸部秀樹編 2003 『かっぱ遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書 114
- 水戸部秀樹 2004 「山形県の縄文時代後期前半の土器について: かっぱ遺跡を中心に」『山形県埋蔵文化財センター研究紀要』2: 1-28
- 武藤祐浩・栗沢光男編 1988 『中小坂遺跡発掘調査報告書: 高速交通関連道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査』秋田県文化財調査報告書 177
- 村木淳・小久保拓也編 2003 『風張 (1) 遺跡 V』八戸市埋蔵文化

財調査報告書 97

- 目黒吉明他編 1975 『東北自動車道遺跡調査報告』福島県文化財調査報告書 47
- 目黒吉明他編 1985 『母畑地区遺跡発掘調査報告 19：荒小路遺跡地蔵田 A 遺跡』福島県文化財調査報告書 148
- 谷地薫他編 2010 『森吉家ノ前 A 遺跡（第 3 次）』秋田県文化財調査報告書 453
- 山内幹夫他編 1996 『摺上川ダム遺跡発掘調査報告 1』福島県文化財調査報告書 319
- 山内幹夫他編 1997 『摺上川ダム遺跡発掘調査報告 3』福島県文化財調査報告書 337
- 山内幹夫他編 1998 『摺上川ダム遺跡発掘調査報告 5』福島県文化財調査報告書 345
- 山内清男 1939a 「加曾利 B 式（古い部分・図版 20～29）」『日本先史土器図譜 第 III 輯』先史考古学会（再録：1967『日本先史土器図譜』先史考古学界，10-11）
- 山内清男 1939b 「加曾利 B 式（中位の古さ・図版 30～39）」『日本先史土器図譜 IV 輯』先史考古学会（再録：1967『日本先史土器図譜』先史考古学会，12-13）
- 山内清男 1958 「37 上 縄文後期臺附浅鉢」『世界陶磁全集 1』河出書房，290
- 山内清男 1964 「文様帯系統論」『日本原始美術 1』講談社，157-158
- 山岸英夫 2005 「福島県から十腰内Ⅱ式土器を考える：福島県北半部の資料を中心として」『北奥の考古学』葛西励先生還暦記念論文集刊行会，149-160
- 吉田充編 1997a 『板倉遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 258
- 吉田充編 1997b 『椴の木遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 263

図版出典

- 図 1：今井・磯崎1968
- 図 2：葛西1987
- 図 3：工藤竹久他1989
- 図 4：岩手県埋蔵文化財センター1984
- 図 5：山内清男1959
- 図 6・7・11・17・20：筆者作成
- 図 8：1～4：小久保編2008、5～7：工藤他編1984、8～10：濱田他編2012、11～13：水戸部編2003、14～16：酒井編1999、17～28：押山・高松編2005
- 図 9：1～7：中村他編2008、8～12：星・中川編2000、13～14：金子・高木編2006、15～31：須原編2009、32～38：秋元編1994、39～43：水戸部編2003
- 図 10：1～8：大野他編2001、9～12：吉田編1997b、13～20：工藤他編1986、21～27：武藤・栗沢編1988、28～35：斎藤他編2004
- 図 12：菅野他編2011
- 図 13・14：小川・高橋編2000
- 図 15：押山・高橋編2005
- 図 16：1～4：小久保編2008、5：菅野他編2011、6：秋元編1994、7・14：小川・高橋編2000、8：斎藤他編2004、9：酒井編1999、10・13：工藤他編1986、11：吉田編1997b、12：水戸部編2004
- 図 18：1：今井・磯崎1968、2～10：関根2005、11～34：藤田他編1991
- 図 19：1：高木他編2012、2：富樫他編1980
- 図 21：1：工藤他編1984、2・3：小久保編2008、4・5・8～10・12～14：菅野他編2011、11・21：押山・高橋編2005、15・19：工藤他編1986、16・17：小川・高橋編2000、18：吉田編1997b、20・22～24：工藤他編1989、25～28：藤田編1991

Reexamination of Tokoshinai-2 type pottery

Hirotsune NISHIMURA

Tokoshinai-2 type pottery of the Late Jomon period is distributed in northern Tohoku region. Nevertheless, its chronological and geographical range is unclear. This paper examined it geographically, stratigraphically and typologically. The author analyzed not individual pottery but potteries excavated together in a feature to examine this type, because it is characterized by the assemblage of some types of pattern. As a result of the analysis, Tokoshinai-2 type pottery is divided into the two groups. Both groups contain the potteries with horizontal band pattern and those with smoothed-over cord marks, but they differ from one another in motifs used in smoothed-over cord marks. One uses interlocking shaped motifs, the other crank or hook shaped. Because both groups are widely distributed in Tohoku region, there is no geographical difference between them. By some typological and stratigraphic analyses, the author concluded they have chronological differences. Thus Tokoshinai-2 type pottery is divided into two phases. Consequently, the middle stage of the Late Jomon period is divided into three phases in Tohoku. Each phase corresponds to the first half of Tokoshinai-2 type pottery, the second half and Tokoshinai-3 type. Furthermore, each one is chronologically equivalent to Kasori-B1, B2 and B3 type pottery, which are distributed in Kanto region.